
お兄ちゃんと妹のすゆことぜんぶ。

かるびーえーる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お兄ちゃんと妹のすゆことぜんぶ。

【Zマーク】

Z6245M

【作者名】

かるびーえーる

【あらすじ】

とあるお兄ちゃんには二つ年下で高一の性に絶賛興味津々中のリアル妹がいます。どういうわけかそんな二人の下に色々な属性を持つ妹が集まっています。つまりこれはお兄ちゃんのお兄ちゃんによるお兄ちゃんのための、違った。妹の妹による妹のためのお馬鹿小説なのです。

お兄ちゅあとココアル妹

『おひいちゃま、朝ですよん。起きてへだせこおひいちゃま
「……ん、んう？」

寝ぼけ脳に刺激を与える見知らぬ幼女の声。

その声の発信源は音声の大小と距離関係からしておそらく田覚まし時計だと何となく分かる。しかし僕は果たしてこんな幼女声仕様の田覚まし時計をセツトしたのだろうか？答えはNOだ。おそらくまた『奴』の仕業なのだろう。僕の脳内で『奴』の魔の嘲笑が浮かび上がる……恥ま恥ましいなんと恥ま恥ましい……が、まだ時計が示すは午前二時半。学生の僕にはモーマンタイな時間帯、したがつて僕は寝ます。お母さん、お父さん、天国のお祖母ちゃん、お祖父ちゃん、おやすみなさい。

『あつら、ひぐら……何で起きてくれないの？おひいちゃま……こじまこじまに起きてるの？……まむつ、れみれー』ピッ

おつと、田覚ましは止めておきましょつ。しかし『奴』には今一度厳しい教育的制裁が必要ですね。

「小夜、僕の前に座りなさい」

夜、僕は朝の悪戯に対して教育的制裁のために一年下の妹、小夜を呼んだ。僕の声に反応した小夜はによによ笑みを浮かべながら駆

け寄ってきた。嫌な笑みですね、この子が何か悪戯を思いつく時の表情です。

「うん」「ペッタン
「……小夜、何故僕の太股の上にまたがるのですか?」
「えつ、まずは前戯からだよね
「……」「ペチ
「あつひ

僕が無言で小夜の頭を軽く叩くと小夜は『うつづ』と唸りながら涙目で僕を睨んでくる。
睨んでも何も出ませんよ。

「お兄ちゃんのばかあ！アホウ！出歯がメガネ！甲斐性無し！スケロマシ！強姦魔！」

ひどい言われようだ。

「とにかく、向かいの椅子に座りなさい。お兄ちゃんは今、モーレツに怒ってるのですみ?」
「えつ……やだ、ひどいことしないで」
「その『ひどいこと』とはどのよつなことか今一度問いただす必要がありそうですが今は置いといて、話は朝の件のことです」
「濡れちゃった?」
「女の子が濡れたとか言わない」ペチ
「あつひ

僕の今までの教育的制裁は何か間違っていたのでしょうか?
僕はこんな破廉恥な妹を育てた覚えは無いのですが、あれですか。
おにいたんおにいたんと後を着いて来たおしめをしていた頃から早

十数年。今や小夜は高一、そろそろ女の子としての第一次成長が始まったのでしょうか？少しはエッチな事も興味はあると思いますが……

「私は濡れたよ、お兄ちゃん」

やつぱり度が過ぎると兄として僕は切に思つたです、ハイ。

「もうそれはいいです、とにかく何故あのよつな頭の悪い田原まし時計を僕の部屋に設置したのですか？事と理由についてはお兄ちゃんは教育的制裁を執行しなければなりません」

「ひどいっ、お兄ちゃんは理由も無いのに見境無く私の事を疑うのね！何てひどい男！そつやつて一次元の妹の事も泣かしているのねー！」の鬼畜！

「…………」「バクッ

「…………」

「…………次元の妹？ははっ、何のことです？」

「…………」

小夜はまた悪戯心を覚えた小魔的な笑みを僕に向ける。ふ、ふふ

…………そうですか、そういうことですか。

そのよつなテーマを僕にぶちまける事で僕を陥れようとしているのですね。甘い、甘いです小夜。そのような根も葉もない嘘は嘘でしかなく、証拠が無ければ意味が無いのです。

「…………おにいちゃんまりめえ～」「ボソッ

「ビクンッ！」

「…………そんなとこ舐めないでえ～」「ボソッ

「ビクビクンッ！」

「…………」

ぬぬぬぬ…………あ、危うい。今の僕の立場位置は断崖絶壁のギ
リギリで立たされるチワワと回じり…………
くつ、くう～～～」のままでは、このままでは僕と妹の立場が、プ
ライドが、社会的地位が……か、かくなる上せり…………！

「い、今から教育的制裁をし、ししし執行しままああああす…………!
！」（太極拳の構えをとるおじいちゃん）
「あつ、お兄ちゃん勢いでこの場をやつ過いだりはじめるでしょー。
？するこつ、するこよお兄ちゃん…」
「うるわああああああこーいいかわせりと尻を僕に向かわオオオ
オオオオ」
「あつ、やだつーホントにそれ向かやらしこ言こ方だよつーあつ、
痛つやめてえーお兄ちゃん…こやまーーーーーーーーーーーーーーー
ンペンペンペンペンペンペンペンペンペンペンペンペンペンペン

今日のおじいちゃんの教育的制裁は『お尻ベンベン丸』でした。 3
〇。

お兄ちゃんさんと年齢不詳ロリ妹

「ねえ、ロリ「ノノ」、聞いてもいい?」

「.....」

「あつ、「冗談つ」、「冗談だよお兄ちゃん。だからその怪しげな調教グッズはしまつて、ね?」

「そうですか、それはよかつた。もう少しで僕の孫の手が火を噴くところでしたよ、ハハハ」

「あは、アハハ.....変態皇帝」ボソッ

何やら不穏なワードがボソッと聞こえてきたような気がしましたがまあ空耳でしょう。小夜はやんちゃでおちやめちゃんだけど極めて心が優しい子なんです。「ラソニシスコンとか言わない。少しくらいのお茶目な悪戯に対しても太陽のよな大らかな心を持った兄である僕が許容してあげないとね。

「で? 小夜、僕に聞きたいことって何です?」

「お兄ちゃんつてどんな妹が好みなの?」

小夜は顎に手をあて神妙な顔付いでそのようなことを僕に聞いてきた。ふむう、どんな妹が好みとな。返答に困る質問ですね.....特にリアルシスターの前では尚更です。しかし変ですね、いつもはそのような表情で案外まとも.....なのか人様によつて見方は変わると思いますが、とにかく案外まともな質問などしないのに。

「どんな.....ですか。君の前では至極答えにくい質問ですがそりですね.....強いて言つならば、小夜みたいな娘ですかね」

「うわあ、無難な返答過ぎてツマンネー。といつかお兄ちゃんキモ

イ」

「アハハ、テスヨネー」むわむわひひ

「あひつ、いはいいはい！」

僕は笑顔で小夜の頬を抓つた。ん？これは教育的制裁では無いですよ？お茶目な台詞を仰るお口に『褒美を』『えているのですよ。飴と鞭でいう飴の方です。のど飴的な？

「うう～～～、これで孕んだらママとパパに『お兄ちゃんにのね、すうじくおつきく！』……その、裂けたの』とか言って暗に近親相姦を匂わせる台詞を言ってやるんだからつ。お兄ちゃんなんか禁欲の底なし沼に嵌まつてホモの黒人に掘られて売られて男欲の快感に果てながらおつちね！このヤリン！」

本当に酷い言われようです。僕が一体何をしたと詰つのでしょうか？

「はあ、もういこよ。十分お兄ちゃんの歪んだ性癖は分かったし……じゃあ、お兄ちゃんと新しい妹を紹介するね。入ってきて！」

「はいなのですよ」ガチャ

「え？ ちよつ……まつ、は？え？ 新しい妹？」

小夜はリビングの方に向かつて声を上げた。リビングのドアが開くとそこにいたのは青色の園児服を身に纏つた身の丈僕の股下くらいの幼女がいた。え？ 何これ？ 何これ？

「こんにちは。貴方の新しい妹の『比奈』なのですよ。宜しくお願いしますですよ」ペコリ

「あつ、はつ、これはこれは！」一瞬ひびつむ……初めまして。僕は小夜のお兄ちゃんです」

「やつですか、よろしくお願ひしますですよお兄ちゃん」

何と幼稚園児なのにつつかりした娘だ。きつと親御さんの育て方が良かつたのだろうね。うちの小夜も爪の垢を煎じて飲んで欲しいものだ。
……じゃなくて。

「小夜、何ですかこれは？」

「ツーフンしたでしょ？」

僕は!! ハーフンなど!! して!! ま!! セン!! !! 压倒的口リ

ぐう、あまりの唐突な展開にお兄ちゃんの頭はついていけませんっ！僕が頭を抱えながら悩んでいるとギュッと服が引っ張られる感覚が伝わってきたので振り向くと上目使いで無垢な瞳で僕を見つめる一人の幼女もとい比奈たんがいた！比奈たんっ……！圧倒的比奈たんっ……！圧倒的比奈たんっ……！

「じゅぢゅう聞くといひがよるとお兄ちゃんお兄ちゃんブレイが」「
所望のようですね?」

「は？ 小夜が何せおかしなことを吹き込んだよ」と、諂ひに申し訳ござりません、小夜に代わって兄の私めがこの場をお借りしておこ

「いえいえ、比奈も嬉しいのですよ。人からたとえその愛が歪なものであっても愛される」とは嬉しいものです。お礼としてパックンチヨあげます。」

「おおおお、ありがとうございます。最近の口りは、ヘルが高いいんですねモグモグはぐつばぐ」ニッコリ
「何だか今日のお兄ちゃんは一段とキモイな……」「

小夜は僕をそこいらのイシツブテを見るよな目で見つめる。何を言つてるんだ小夜、人様から何かを貰つたらお礼を言うのが筋つて

ものではないか。

「ところがお兄ちゃん、比奈は撫で撫でを所望するのですよ」

「ふ、ふむ撫で撫で……い、色々なところを撫で撫で……」

「頭でお願いしますよ」

「デスヨネー」

「おーよひよひよひー・おーよひよひよひー・おーよひよひよひー・」

ペッタんペッタん

「んっ、お兄ちゃん。比奈はもつと優しげな撫で撫でを要求します

です」

「（おこ、誰か）の男を止めろ」（小夜様の心の雄叫び）

僕に第一の妹が出来ました。 85点。

お兄ちやんと年齢不詳口リ妹（後書き）

小夜さよ
(16)

第一の妹。リアルシスター。黒髪ロング。

属性：悪戯つ娘

比奈ひな
(?)

第二の妹。幼稚園児（年齢不明）？水色ツインテール。

属性：口リ（仮）

お兄ちゃんと巫女妹（前編）

「お兄ちゃん、お風呂上がったから入つてもこよー」

リビングで食後の紅茶を啜つて新聞に目を通していると浴場から僕を呼ぶ小夜の声が聞こえてきた。……一見、普通の台詞に聞こえるだろう？だが、これは我がリアルスターの一種の僕を陥れる策略だといふことは長年一緒に暮らしてきたこと也有つてか僕の研ぎ澄ませれた直感がビンビンと感じとつている。

「……小夜、リビングに来なさい」

「……」

僕が返答すると小夜は玩具を取り上げられた子供のような顔つきで頬を膨らませて、リビングに入つてくる。案の定、小夜の格好はタオル一枚を身に纏つたあられもない姿であった。大方、僕が何食わぬ顔で浴場に入場してきた瞬間、『きやーお兄ちゃんのエッチ！バカ！あほう！ドスケベ公大使！』とか罵り、僕を虐めるとかそんな感じの算段であつたのだろう。

「……さあ、何か来世に言い残したい事でも？言い訳によつては教育的制裁を軽くしてあげる事も考へない事もないです」（孫の手を構えるお兄ちゃん）

「……そつ、そんなん、棒を構えてこんなほどんど裸同然の私にな、何をする気なお兄ちゃん……怖い、やだ……やめてお兄ちゃん……私、そんなことされたら（／＼）」モジモジ

「ふおつ」ビクッ

「……お、おつとじ、そうきましたか。

……しかし悪戯とは言え、咄嗟に何で迫真の演技をするんでしょう
かこの娘は？一瞬、一瞬ですよ？ほんの一瞬……兄としての尊厳が
失われるところでした……危ない危ない。冷静になるんだ僕、僕は
小夜のお兄ちゃんなんですからね。小夜に対してふ、ふしだらな…
いや、健全なる教育的対応をとらなければ。

「……」ほんっ、えー、小夜。先に着替えてきなさい。お兄ちゃん
の教育的制裁はそれからです」

「うつ、うつ、うつ、うつ、うつ、お、お兄ちゃんのバカあ！あほう！チキンナゲ
ツト！メスゴリラに無理矢理獣姦されてひと夏のチエリーボーイか
ら脱却しちゃえればいいんだこのチンカスマン！――びえええん！
！――」ドタバタドタバタ

小夜はそんな事を言い、あからさまな泣きマネをしながらリビング
から退場してしまった。ものすごく酷い言われようです。ああ神様
仏様、一体僕が何をしたと言つのでしょうか？

「お兄ちゃん、お湯頂きましたですよ。すくべ気持ち良かつたです
よ。ありがとうございます」

小夜がリビングから退場してしばらくするとバスタオルを首にかけ、
白地の水玉模様のパジャマ姿のもう一人の僕の妹、比奈ちゃんがリ
ビングに来ました。ああ、何て愛らしい。僕は決してロリータコン
プレックスでは無いのですが、そんな僕から見ても比奈ちゃんは愛
らしいのです。普段はツインテなのですが、お風呂後の髪を下ろし
た姿なんかもう……！おっと、ごほんごほん、冷静になるんだ僕、
僕は比奈ちゃんのお兄ちゃんなんですからね。…………僕は決して
ロリータコンプレックスではないのですからねっ！

「それは良かった。お兄ちゃんは熱湯が好きでね、上せなかつた？」

「いいえ、比奈も熱湯は大好きなのですよ。お友達にはおばあちゃんみたいとか言われますけど、自分の信念は決して曲げるつもりはないのですよ。それができた女つてものなのですよお兄ちゃん」キリツ

比奈ちゃんは生き生きとした瞳で僕を見つめながらそんな事を言つ。やだなにこの娘、かわつこ（かわいい + かつこ）。

「それはそうとお兄ちゃん、お風呂上りなので比奈は喉がからからなのですよ。お飲み物を所望するのですよ」

「ああ、もうだね。何がいい？ミルクがいい？それともミルクがいい？あつ、こんなところにミルクが」

「ジンジャーをお願いするですよ」

「おっけー、用意するからちょっと待つてて」

僕は慣れた手つきでガラスコップに三個の比較的小さめの氷を投入し、ジンジャー・ホールを注ぐ。容量の七割くらいの量がベスト。そしてこの一連の流れの所要時間、約3秒。人はそれを『お兄ちゃんのジンジャー・ホール』と呼びます。

「はい、どうぞ。召し上がり」

「ありがとなのですよ……グビッグビッ……ふはつ、くつ、最高なのですよ……一風呂上りのジンジャーは喉に独特な炭酸の刺激を『えてくれて最高なのですよ……これがあるから妹やつていけるのですよ……』

比奈ちゃんは『満悦の』様子。良かった、お兄ちゃんのジンジャー・ホールが炸裂したようです。

「あ、お兄ちゃんもお湯頂いて下さいなのですよ。ここお湯ですよ、

湯船のお湯は張りなおしましたけど、

「…………は?な、何故湯船のお湯を…………?お、お兄ちやんは眞にしな
いよ?むしろ喜ぶ。

「小夜ちゃんが『お兄ちゃんは私のエキス含有の残り湯をケビケビ飲んだり、私が使った風呂椅子とか風呂床を舌でペロペロ味わったりするから』とか言いながら、お湯を張りなおしたり、新品の風呂椅子を用意したりしてたのですよ」

卷之三

ひ、ひどいっ……そこまで言つ事ないでしょう小夜……！どんな変態なんでしょう僕はっ……！？うつ、うつ……不甲斐無いっ、実に不甲斐無いっ……！あまりの不甲斐無さに僕は泣きたかつたっ……！でも、我慢。お兄ちゃんは決して妹の前では泣いちゃダメだ泣いちゃダメだ泣いちゃダメだ泣いちゃダメだ泣いちゃダメだ泣いちゃ

「お兄ちゃん、泣いてもいいのですよ」

「……つ、ぼ、僕はつ……泣いてなんかつ……」

泣いてますよ、心が

「おまえ、おまえがやつたんだから」

僕は比奈ちゃんの胸の中で泣いた。あまりの不甲斐無さと、自分に対するプライドをかなぐり捨てて泣いた。ああ、これが妹……優しく僕を受け入れてくれる妹なんだ……ぬくもり、僕が妹に求めていたのはこんなぬくもりなのかもしれない……

卷之三

「落ち着きましたですか、お兄ちゃん？」

「……ああ、ありがとうございました。君のおかげ

です。そして、ありがとう。僕はこの傷ついた心と身体をお風呂場で全部流してくるよ、そして忘れない。このぬくもりを……」

「こつてらっしゃこなのでお兄ちゃん」

「へへこゑあわへおのづちうわおれ世せ
おはなねぐつあえり」

僕は高揚したこの気持ちを胸に堂々と脱衣所に入場した。だからかもしれない、僕はこの時気付かなかつたんです。浴場にいる新たな妹の存在に――――――そして僕はハンドタオルを片手に堂々と浴場に入場した。

から
—
—

「」

「魔法をかけて」
——シマリ

「だつ、誰ですか貴様はああ

— ! . ! . ! . — ! . ! .

「ほーーー！」 バッキィイイイイ

妹のぬくもり———ベストプライス。90点。

お兄ちゃんと巫女妹（後編）

「ごめんなさい」
「つ（／／／）」 プルプル

浴場での『キヤーオーライチヤンノバカツスケベツエツチイ！』的なイベントの後、僕と謎の少女はとりあえずリビングにいた。それからというものの僕は正座で出来るだけ真摯に彼女に謝り続けた。僕の前にはその彼女がいるのだが、これが驚いた事に巫女装束を身に纏っていた。彼女は長い黒髪を白の髪留めで後ろで結つており、白き肌はまさしく神に仕える者にのみ与えられたかのよう。僕はそんな神秘的な雰囲気を纏つた彼女に思わず魅入つていたが、大の彼女は僕の前で正座で身体を振るわせながら、真っ赤な顔で無言で僕を睨んでいた……その対抗的な瞳が何ともそそられ、ませーんつ……！お兄ちゃんはコーフンなどしませんつ……！嘘ですつ……嘘つ……ちょっぴしドキドキしましたつ……！

「うわー、巫女さんだよお兄ちゃん。あれだよね、お兄ちゃん巫女さん大好きなんだよね。この間なんか『あの神聖な装束に僕の白き気高き子種をぶちまけて禁忌プレイを是非したいですっ……（／＼）』とか言いながら巫女さんの格好でアナニーしてたよね」

何故かその場には小夜も同席していた。ちなみに、良い子の比奈さんはもうおねんぬ中である。そして、我が妹よ。この状況下でることない」とぶちまけるのはヤーメロイド。

「キャー痛いっ、痛いわッ良美！やめてあげてっ！神聖なる元巫女でお兄ちゃんを何度もしばかないのであげてっ！……お兄ちゃん何か変なプレイに田覚えそうでフォツ！」

「いえー巫女さんもつとガンガンにいてまえ打線！ヒューヒュー」

そしてリアルシスター様が余計な事を言つた所為で僕は巫女様に股間をしばかれる破目に。その横ではさらに巫女様を煽るリアルシスター様。

「まつ、待つてくれっ……！今のは小夜の嘘という名の悪戯だから落ち着いてお兄ちゃんの話を聞いてくれ未だ名知らぬ巫女さん！」
「あ、うつ……す、すまん。ついカツとなってしまった。申し訳ない、私の悪いクセだ……」ホンゴホンッ（／＼）

巫女さんは自分の行動が恥ずかしくなったのか少し赤らめた顔で咳き込み、再び僕に向かい合つ形で正座する。うんうん、お兄ちゃん素直な子は好きだよ。

「えーもう終わりなの?ツマンネー

「小夜は黙つてなさいつ、めつーまたお尻ベンベン丸しますよー！」

「……………痛いお位置きはやがよお只な」[リ][リ]

『お元気パン丸』とか二三の机の上に置かねあああああ

バシツバシツバシツバシツ

「いやー誤解です誤解です誤解です誤解ですうううううううん！」

!!!!!!五戒なる誤解ですうううううう

やめて、元巫女でお兄ちやんの乳首を責めるのはやめてあげてえええええー——————」

「はあはあ……また、やつてしまつた。ほ、本当にすまなこ……（／＼＼＼）」

一通り僕の性感帯をしじまき終えた巫女さんは再び正座し、謝つてきました。

「はあはあ……こ、いこよお……激しかつたけど……でも、気持ちよかつたよお……ハアハア（／＼＼＼）」
「何かお兄ちやんのその台詞、素で気持ち悪い……」
「うう、本当に申し訳ない……」

しかし、田の前の巫女さんを見て分かった事がある。彼女はどうも感情の起伏が激しいようだ。自分の感情をストレートに前面に押し出す所為か、感情をうまくコントロールできなにようだ。何ともそのギャップが妹萌え……とか言つてる場合ではなく何故、我が家の風呂場にいたのか不思議なのだが。

「ねえねえ？巫女さんの名前なんていつの？私の名前は小夜。田口シクね」

「ああ、言ひ忘れていたな。「ホンシ、えー……私の名は琴音」という。えっと、小夜さんと……」チラシ

琴音ちやんはオドオドとした様子で僕をチラ見する。

「初めまして、僕は小夜のお兄ちゃんです。ヨロシクね」

「え
…
…
名前？」

「お兄ちゃんはお兄さんですか?」 | パン

「（何言つてんだコイツ）」

「琴音ちゃん、お兄ちゃんのトトロルトロは『お兄ちゃん』なんだ

۹۱

「で、でふおると……？な、何それ……」

卷之三

「何だコイツラ」

お兄ちゃんに名な必要なし……お兄ちゃんはお兄ちゃんであつてあくまでもお兄ちゃんに過ぎず、それ以上でもそれ以上でもない、いわばお兄ちゃんの皮を被つたお兄ちゃん……すなわちのIT-YANなのだ。

でもしようじやないか

たあああああ———！———！———！———！———！———！

「…………（そろそろウルサイ）」（呆れる小夜様）

ガチヤツ

「……何なのですか、もう現在の時刻は21時30分。良い子の皆

はとつぐに就寝中なのです……静かに、するのです、よ……スピ

ー、スペードー」

「「「…………」「」」

リビングの戸が開くとそこには寝ぼけた比奈たんが立っていた。そして鼻づけうちんを作り、そのまま再び夢の世界へ旅立つ比奈たん。

…………すいじべ、その、器用です…………（／＼／＼）

「うわ、この口リコン征夷大將軍があああああ…………ブタ箱にぶち込んで一生出られない身体にしてやるわあああああ…………！」

「ひぎいいいい…………らめええええ…………お兄ちゃん激しいのせらめなおおおおお…………」

「ふあ…………（そり、寝るか）」（欠伸をする小夜様）

僕に第三の妹ができました？ 45点。

お兄ちやんと巫女妹（後編）（後書き）

琴音ことね（15）

第三の妹。黒髪ロング（但し巫女コス時は後ろで結っている）

属性：巫女

【幕間】『妹増殖計画会議?』

闇に包まれた地下のとある一室。

そこは関係者以外未だ誰も立ち入った事の無いわば『奈落の底』。興味本位で近寄つた者は容赦なく喰われ、永遠に奈落の愚者の仲間入りとなる。

その都市伝説のような噂は瞬く間に広まり、そのいわばシーケレットプレイスに挑む勇敢な猛者達が現れた。

しかし、夏草や兵どもが夢の跡——皆、無事に帰還した者はいいない、敗れていったのだ、奈落の愚者たる彼らに。全てを、いや裏世界を飲み込む闇の住人もとい永遠の奈落の愚者らは今日も今日とて理想郷の実現に向けて動き出す。ゆっくりと、しかしながら着実と、確実に我々人間社会に浸透していくのだ。

『妹増殖計画』

「——それでは、第七十一回『妹増殖計画』について会議を行います」

パワーポイントのモニターの光のみの暗室。そのモニターの右サイドに立つ少女がはつきりと厳かにそう告げた。広い奥行きのあるテ

一ブルの前には人影が十三人。右側に六人、左側に六人、そして我こそが独裁者といわんばかりにオーラを放つ白ヒゲを携えたご老人が奥の中央に一人座っている。

「……よかる。それでは名波君、早速じやが今回の対象者の説明に移つてくれんかの」

「……はい、長老」

名波と呼ばれた少女は少しの緊張からか、フーッと息を吐き一呼吸を置いて暗室を見渡す。顔は良く見えないがその場に漂う緊張感は伝わってくる。しかし奥に佇む『長老』と呼ばれたご老人は目を伏せ、少女の次の言葉を待つている。

「……では、今回の『妹増殖計画』の対象者となつた人物を紹介する前に此方の我々が対象者の家の中を撮影した動画をご覧下さい」

ざわ…ざわ…

その場に緊張感が走る。それもそうだ、この計画は今に始まつたことではない。数年、いや数十年前から行われてきた計画だ。これまでにその計画は老若男女問わず様々な対象者が選ばれてきたがどれもこれも失敗に終わつた。——もう、失敗は許されない。長老の周りにいる十二人の奈落の愚者らは食い入るようにジッと動画を見つめる。対象者のありとあらゆる特徴を知るためだ。人はそれを盗撮と呼ぶが、彼らにはもう後がない。そして、今回も例外なく対象者に関する動画が始まる——

『…………』
『…………』
『…………』

最初にモニターに映し出されたのはトイレ。『…………』トイ
レの戸を開いた男、すなわち今回の対象者と一トイレの中で便座
に座つており、何が起こったのか分からぬといつた表情を浮かべ
る巫女がいた。

「 「 「おおおお……………」 」 」

その動画が映し出された瞬間、何人かの奈落の愚者らは一様に声を
上げる。それもそつた、今まさに我らが巫女様がトイレで放尿をし
よつとしている最中の風景が映し出されたのだから。

「皆の者…………！静肅につ、静肅につ…………！黙つておれつ…………！聞こ
えんではないかつ…………！音つ、音つ、音つ…………！年寄りのわしは耳
が遠いのじや…………！黙つておれつ…………！」

……何の音？と思つても問う者は誰一人いなかつた。皆、長老
の激高した表情を見るとすぐさま黙つて再びモニターに映し出され
る動画に目をやつた。

『…………つーーーーつ（／＼／＼）』 ブルブル
『…………ちがつ、違うんだ琴音ちゃん。これは、その』

琴音と呼ばれた巫女の少女は真つ赤な顔で俯き、露出した下半身を
装束で必死に隠している。それに對し、対象者の男は慌てふためき
オロオロしている。しかし、一向にトイレのドアを閉める氣配無
し。

「なんとこい……一変態つ……」（奈落の愚者A）

「鬼畜つ……！」こんな男が今回の対象者だ、と……。いや、もつとやれー限界までつ……。守銭奴のよつて絞つてしまへ!」

卷之三

「今！私は！モーレツに感動している！」（奈落の懸垂）

卷之三

巫女さんは羞恥心を必死で抑えながらも、対象者の男を睨みつけた。その対抗的な瞳にノックアウトされたのか他の愚者らも「ふう……」とか「ビックリだぜ……」とか言いながらその場で蹲る始末。まさに下郎。

『ち、違う……落ち着いてくれ琴音ちゃん……僕はこのWCをワールド・カップと間違えて入ってしまったんだ!』

『キヤーダメツ・イヤツ・ソ・ンナコトサレタラオーライチャ』 プツツ

「……以上が今回の対象者の人となりを示した動画でした」

「へそつ、何て奴だつ！変態野郎めつ…………ゆるせねえ！せつてえ

「男の風上にもおけんな……あのメガネの小僧！」（奈落の愚者）

(B)

「ぐう……俺達での巫女の少女を悪鬼から救つてやれねえ」と
がモーレツに悔しいぜつー」（奈落の愚者C）

「琴音タン、チコッチコ」（長老）

動画が終わると、奈落の愚者らは一様に今回の対象者について意見を交わした。第一印象は最悪、どうやら今回の計画も難航する模様であった。

「何故かイカ臭いスメルがブンブンしますが、軽くスルーして今回の対象者について軽く説明します。対象者の名は『お兄ちゃん』、十八歳で高二。女性経験は無し、いわゆるチヨリーボーイです。家族構成は父、母、二つ年下の妹。但し、父は単身赴任、母は消息不明で共に両親は家におらず、対象者と妹の一人暮らしのようですが」「ちい……！それでの鬼畜メガネは自分の妹に毎日ナードしているんだな！？なんてえやつだ！」（奈落の愚者D）

「くそお……！リア充経験者の俺でさえそんなことしてもらつた事ないのに……！」（奈落の愚者E）

「落ち着かんかつ……！今は黙つて名波君の報告を聞くのぢゃや…」

（長老）

名波による対象者の説明が始まるとまた奈落の愚者らがざわつき始めるが、それをなだめる長老。どうやら皆、一様に今回の対象者に対する思いがいろいろあるようだ。

「そして、その妹といつのが『小夜』、十六歳で高一。悪戯っ子属性のようです。そして、我々が送り込んだ妹、『比奈』に『琴音』。彼女らにはこの計画のことは伏せていますが、どうやら『お兄ちゃん』は着実に我々の計画に嵌まっているようです」

「……ふむ、じゃがまだわしらが今回の対象者に送り込んだ妹は一

人。まだそう急かんでもよからう。今はまだ様子見じや。名波君、これからも対象者に新たな妹を送り込んでくれんかの」

「はい、わかりました長老」

「じゃあ、今日のところはこれくらいにして解散じやの」

長老の合図をキッカケに奈落の愚者らはゾクゾクと椅子から立ち上がり、暗室から退場していく。そして、暗室に残つたのは長老と名波のみ。

「……ところで名波君、ちょっとといいかの」

「……はー?」

「一発やらせてくれんかの」ハアハア

「くたばれクソ爺」

【幕間】『妹増殖計画会議?』（後書き）

長老（79）

『妹増殖計画』の代表。実は只のエロジジイ。

名波（12）

『妹増殖計画』における奈落の愚者らの総指揮者。青髪ロング。

奈落の愚者

計12名からなる『妹増殖計画』における幹部。AからLまであり、Aがもつぱら偉い人。逆にLは最下位。元リア充、童貞など選り取り見取り。

お兄ちゃんとメイド妹（前編）

- 1 -

週末の日曜日、僕は小夜を連れてオタクの聖地、AKIBAにせつてきました。

というのも、アニメ『魔法少女まじかる』プリンに登場する主人公、プリン・カスターの声優、桃井林檎ちゃんのライブイベントがここAKIBAで開催されるためです。ちなみに比奈ちゃんと琴音ちゃんも誘つたが何故か一人とも悲愴な表情でキッパリ断られたので来ていません。

「……ねえ、お兄ちゃん」

ん？何だい？小夜

「別に……ね?」一ゆのを否定するわけじゃないけどね。普通、実の妹を誘う?」

小夜は何処か怪訝な表情で僕に聞いてきました。

「それはどういう意味だい小夜？桃井林檎ちゃんは歌つて踊つて演じるパーフェクトなモエモエアイドル声優なんだよ？ハアハア、プリンちゃん可愛いよプリンちゃん舐め舐め」ペロンッペロン

「……何か微妙に話の論点がずれてるんだけど。あと、休日

つて今までからうじでひた隠しにしてきた本性をこれでもかってい
うほどこんな公の場でさらけ出すのやめてよ。実の妹の前でアニメ
のキャラの写真をペロッペロ舐めるとか普通にドン引きだよ」
「休日は人間を狂わせる魅惑の刻……まあ、己の内なる悪魔を吐き

出するよおおおおおおおおメシテゴーサよー！テインクルチングルリワク

イイ――――――ン!――!」（魔法処女プリンを呼び出す呪文）

「ちよつー?ちよつとやめてよお兄ちゃん!見られてるよ私達!ほ

瞳で見つめて「…え？ 何？」の羞恥プレイ…。「ちよっとほりひ止
気に戻ってよお兄ちゃん…」「あひたゆひや

1

小夜に肩を揺さぶられて僕は正気に戻ったようです。いかん、いかんですね……休日だからといってお兄ちゃんちよつぴりはつちゃけ過ぎたようです。そして辺りを見ると何故かパチパチパチ……と少し抑揚の無い拍手が上がった。どうやらお兄ちゃん、小夜に心配かけたみたいですね。

「『めんよ小夜。ちょっとお兄ちゃん、あまりの嬉しさにほつちやけたみたいです。エヘ』

なかつた気がするけど……」「

「それで？さつき小夜が聞きたかつたことって何ですか？」

た……だから……！そんな（アーッ）声なヘントは妙を語りな
んてどうなのって聞いたの！フツー・ル・ユーのつて同じ趣味をもつ

た友達とか、彼女とかを誘うでしょ？」「

「ぐわらつ」と言つたけど結構重いよその口調」

まあ確かに自分一人でそういうイベントに行くのはすごく寂しい、

ものす」おく寂しい、ハムスターのように死ぬほど寂しい。だからせめて共感できる人を連れて行きたいというのが僕の本音です。なので身近なシスターZを連れて行きたかったのですが……ウブで恥ずかしがり屋のですかね。

「しかし、そう言いますけどね小夜？ そのようなイベントでは必ず自分と共感できる仲間という名の心の戦友^{じゅうゆう}がいるのです。ですからそのような温かな輪を広げていこうことが僕の手と手を合わせて幸せなのです」

「ねえお兄ちゃん。私、喉渴いたんだけ……」

小夜は既に僕の前、はるか先を闊歩していた。ふむ、いつの間に我が妹はスルースキルを見つけたのでしょう。お兄ちゃんもう……泣いてもいいかな？

「「「お帰りなさいませ、ご主人様 お嬢様」」」

喫茶店に入ると黒と白地のドレスに身を包んだメイドさん達がステキングな笑顔で僕と小夜を迎えてくれた。その屈託のないメイドさん達の笑顔は僕の荒んだ心を十一分に癒してくれる……うん、もうあれだね。メイドさんはリリンが生み出したジャパーズカルチャーノ極みですね。

「……何、こい」

「ん？ 喉が渴いたのでしょうか小夜？ お兄ちゃんに気を使わないで遠慮なくドンドン注文しちゃいなさい。お兄ちゃんはしばらくメイド

さん達の真っ白で綺麗な生足を覗きしていりますから「ジッ
「いや、そうじゃなくてね。ていうか妹の前で当然の如くセクハラ
発言しないでよ」

「『主人様、お嬢様、お手拭です』」

しばらくすると、口り顔のメイドさんが純白のお手拭とウォーター
の入ったグラスを席に持ってきてくれました。

「ああ、ありがとうございます……もふつ、もふもふもふもふー」
「……ちょっと、お兄ちゃん？お手拭で顔をもふもふしないでよ。
行儀悪いでしょ？」

「おっと、僕とした事が、失礼。メイドさんのいいかほりが染み付
いたタオルに我慢できなくつい……僕の悪い癖です」

「はあー……もおホントに私、喉乾いちやつたから注文するよ？え
つと、アイスコーヒーは……つて、高つーちょっと何コレー？本当に高いんだけどー？アイスコーヒーに千円とかばつたくりー？」

小夜は信じられないといった表情でメニューを食い入るように見つ
める。ふむ、ここはメイド喫茶のリピーター歴五年である先輩の僕
が詳しい解説を教えてしんぜよ。

「小夜は…………初体験なんだね」

「やめて、それ単体で言つのやめて。あと何かその含みのある間も
やめて」

「『』メイド喫茶では普通の喫茶店とは違い、『』主人様に『』奉仕
する』のがモットーで『』ぞいます。あくまでも『』主人様に悦……喜
んで頂けるのが私達の喜びであり、如いては『』主人様の喜びでもあ
るのです」

僕がメイド喫茶について語りついた時、突然後ろからそんな声が

聞こえたので振り向くと、ライトグリーンでショートヘアのメイドさんが行儀よくおぼんを両手で持ち、その場に立っていた。

「う、うわっ……ぬ、メイドさん！？」、いつの間に僕の背後に…
…し、刺客！？」

「驚かせてしまって申し訳ありません」主人様。ですが、メイド喫茶の何たるかを語るには「主人様のようなチンスには十年早いと思いまして、私が説明し始めたのです」

「ハハツ、そつかー。いいよいよおー続けて」二三三三

「気付け兄よ。さりげなく、馬鹿にされていることを」

「今のはオプションのサービスでござります。シン度一十%配合でございます。八百円加算でござります」

「やうだぞ、小夜。今のはサービスなんだ。よく覚えておきなさい」

「……お兄ちゃんがそれでいいならいいけど」

「では続きをば。そのようなサービスの延長上に当メイド喫茶ではドリンク類やお料理のメニューができたのです」

「ふーん、で？それとメニューが高いのは関係あるの？」

「無いです。ぶつちやけ只のぼったくりでござります」

「ぶつちやけた！？最悪だよそれ！」

「ちなみに、ぼったくりとかそんなのはあくまでこの作品の世界の設定なのであしからず」

「？何言つてなお兄ちゃん？」

「何、只のメタファイクションです」

「？」

……と、そんな事をしている内にもうすぐ、桃井林檎ちゃんのライブイベントが始まってしまうじゃないですか。メイドさんは名残惜しいが、今はライブイベントが優先です。

「小夜、そろそろ行きましょう」

「ちょっ……私まだ何にも頼んでないよー。」

「仕方ありません、もうすぐライブイベントが始まつてしまつのですよ。早くないとプリンプリンできません」

「もー、わかったよう……ごめんな、メイドさん」

「いいえ、よろしいのですよ。行つてらっしゃいませ、お嬢様……」

僕と小夜は清楚なメイドさんに見送られて、メイド喫茶を後にした。
さあ、今日は存分にプリンプリンしないことね。

「……行つてらっしゃいませ、私だけのお兄様」

お兄ちゃんとメイド妹（後編）

「いやー、今日は楽しかったね小夜」「楽しかったのはお兄ちゃんだけでしょ……はあ」

あれから桃井林檎ちゃんのライブイベントをひとしきり楽しんだ僕と小夜は朱色に染まるAKIBAの街並みを眺めながら歩いていました。夕暮れ時でもAKIBAは活気を失うことなく、行き交う変態紳士の皆様は活動に勤しんでいますね。僕も他の紳士を見習つて買い物を続けたいのですが、そろそろ帰還しないとお家で待っている子猫ちゃん達がぽんぽんをクークー鳴らせて今か今かと晩御飯を待つていると思いますからね。お兄ちゃんは大変なのです。

「今日はイベントの他にも数々の戦利品も購入できましたし、お兄ちゃんはハッピーマンです」

「私、お兄ちゃんに堂々とえっちい本のコーナーに連れて来られたときはちょっとぶっ殺そうかと思つたよ」

「小夜、本ではないのです。同人誌とお呼びなさいっ！」

「どっちでもいいよそんなの。あとつるせいし。それだけでもアレなのに……何これ。セクハラ?」

小夜はいつの間に僕の手提げ萌袋から抜き取ったのか、一冊の同人誌の表紙を僕に見せつけてきました。タイトルは『お姉ちゃんと弟のすゆことぜんぶ』。表紙は大量のザメンが顔面にぶつかっていいるツインテの美少女のドアップ。それに加え彼女の扇情的な笑みがますます僕のようなエロガッパを惹きつける要因となつていてる品です。

「小夜、それはすんばらしい同人誌なのですよ？お姉ちゃんと弟

の様々なエロティックショチューンがその一弾にキューッと濃縮されているのです……必要以上のビーチクペロペロから始まり、愛の亀甲縛り、愛のアル責め、黄金水放射、おつお姉ちゃん……！僕、そんなところ入らないよおーっプレイなどなど……ドMの変態紳士には堪らない一品に仕上がっているぞーーむかむどうーなのです……ふう

「アハハハ」

僕が同人誌の内容の説明を終えると、小夜はレイプ眼で僕を見ながら何故か声を上げて笑っています。何がおかしいのでしょうか？これはお兄ちゃんも笑うちゃうといふのでしょうか。

「ハハハハ！アハハハハ！」
「アハハ！アーッハハハハ！」
「うひやひやひや！ブヒヒヒー・フギヤー！『げほつげほつ』『じほつ』」
「笑ってる場合じゃないよ」
「『めんなさい』」

何故か今度は真顔で叱られました。お兄ちゃんひつぴり反省。

「お兄ちゃん？私は本気でお兄ちゃん（の頭）を心配しているんだよ？」

「心配？何を心配するのです？それよりおっぱいを心配した方がいいですよ」

「つまご」と言つたつもりか若ハゲ

小夜は真顔のまま、淡々とした口調で言つ。お兄ちゃんちょっと傷ついたやいました。シューーン。しかしまいつたです。これは好感度-100といったところでしょうつか？小夜は『おにいちゃんのあほお！えつちーばかあ！（ーーー）』とか言いながらふんすかふんふ

んと怒つてはいませんが、小夜の僕を見る目は「この世の生きを受けた者を見るソレではありません。ちょっとシンシンシーン」とかそんなレヴェルでもありません。そんな冷たい瞳にちょっと下の方がドキドキしたお兄ちゃんなのでした。

「ほら、さつさと帰るよキモメン」

「はい」

「お帰りなさいませ、ご主人様、お嬢様」

「…………」「」

お家の玄関の扉を開くと正座で僕らに向かえるメイドさんがいた。彼女は無表情ながらも上から身体一つ一つのパーツがバランスよく整つていて、まさに成人女性の鏡といった感じの女性だ。

「何、魅入つてんのお兄ちゃん?」

小夜は怪訝な表情で僕を見据える。

いけない、お不埒な思考はいけません。僕は変態といつぱりの紳士……。

ここのは落ち着いて素直な僕の気持ちを紡がなければ。

「メイドさん」

「はい」

「僕の膝裏にキスしてもらえませんか?」

「何言ってんの!?」

小夜は『何？お前馬鹿じゃない！？』のよくな台詞の籠つた瞳で僕を見つめる。

失礼な、僕は素直な気持ちを紡いだままで……それなのに、そんな今にも射殺すような瞳で見つめるなんて……ひどい、ひどい……です、もつと……こんなお兄ちゃんを見てくださいませ。

「はい、『主人様の』要望とあらば……」

メイドさんはお上品にスカートの裾をちょうど太腿の付近まで両手で持ち上げ、僕の前で美脚を露にする。

「……これは素晴らしい……足の素肌は彼女の着用している白のオーバー＝ソックスのせいであまり露出されていませんが、それが何ともそそられるのです。『今から僕が彼女のにーそつくすを無理矢理脱がすのです……ああ、その先には美肌の黄金卿……』そんな、高揚とした気分になるので……ああ、いけません。僕のおぼっちゃんがによきによきと田代覚めてしましました。不埒です、ああ不埒……メッシュ、お兄ちゃんのメッシュ。

「ウフ、ウフフ……ちゅつちゅつしても……こいですか？（／＼／＼）

「は……『主人様の唾液でじつと濡れた唇で碧の膝裏にマーキングしてぐだわこめし……（／＼／＼）』

「何『メッシュ、すん』ごడン引きです」

小夜は僕とメイドさんから少し離れ、膝裏ちゅつちゅつプレイを見守っています。

ふむ、しかし……膝裏ちゅつちゅつするにはオーバーオナーネーション……おつと、じやなくてオーバー＝ソックスが邪魔になりますね……。僕は彼女の足元に犬のように四つん這いで這いより、両

手で一ソックスに触れます。

「あつ……ご、ご主人様」

「……これ、邪魔だワン？ クンカクンカ……ハフツハフツ」ズルズ

「あ、ああ……」、ご主人様あ……そんな、犬のように碧の二トソ
ツクスを嗅がないでくださいまし……」

「何コイツラ、すんごい殺したいです」

ああ！早くつ、早くこの二ーソックスを剥いて、彼女の膝裏をペロペロしたいつ！

かかります。

「……や、貴様あ、ふるふる

おひと 奥のリビングから琴音がやんと足奈がやんもい登場のよう
です。

しかし やめられないと言いたい 今の僕は欲望で支配されたお兄ちゃんという名のお犬さんなのですワンワン。

「ハツ、ハツ、ハフツ、早く膝裏ちゅつちゅつをせるワンワン！」

「いやあ……ご主人様……碧に乱暴はお止めくださいまし……」「ちゅつちゅつちゅつちゅつ」

「いつまでやつてるかこの駄犬がああああああ――――――――――――

「キヤン！」バキッ

「……で、貴様。何か現世で言い残したい言葉はあるか？」

「……あつ、この首輪……ちよつと興奮します……（／＼／＼）」

リビングにて。

僕は首輪をかけられまさに本物の犬気分、つまりは琴音ちゃんに僕の身体を蹂躪されているところといった状況なのです。

「貴様あ！人聞きの悪い事を言つなつ。誰が貴様の身体なんぞ弄ぶかこのつこのつ！」ペンペン！

「ああー！つ！痛い！いつたあい！お尻をペンペンされるなんてアタシ何年ぶりかしら！何年ぶりかしらー見られてるつ！あたし妹達に見られてるう！」

「休日モードのお兄ちゃんは何をしてもきもいね……」

「ワンワン、ワンワンなのです」

妹達に白い目で見られるこの快感……。

ああつ、恥ずかしい！アタシ、何てふしだらな事を…ダメつ、早く平日お兄ちゃんモードにもどりHIGHHTE！アタシ、どうにかなつちやうよおー！

「はあはあ……すゞい、すんごいわ……」

「あの……」主人様、そろそろ……碧の話を聞いてもらひえますでしょつか……？」

メイドさんは無表情で僕に尋ねる。

ふむう、しまつた、彼女のことを見失っていたね。彼女が何故、僕の家の玄関で待機していたか。かつ、何故彼女の膝裏から濃厚なふえろもんが漂っているのか……僕は家主としてそれらを知る権利があります。

「ふむう、それじゃあ……まず、君の好きな体位を僕に教えてもらえるかな？」

「一回、死んだ方がいいよお兄ちゃん。エロゲーのやりすぎなんじやない？」

「ワン、ワーンなのです」

小夜は僕をゴミ虫でも見るかのような目つきで睨みます。比奈ちゃんは比奈ちゃんで、犬プレイが非常に気に入ったのか、リビングのソファーの周りを四つん這いになりながらグルグル周っています。

「碧……それが私の名前です」主人様。「主人様も気軽にそうお呼び下さいまし。以後お見知りおきを……」

碧と名乗ったメイドさんは丁寧に御辞儀をしてそう自己紹介する。あらやだ、何て嬢のいきどいたメイドさんなのかしら。アタシ、キュンと色んなところ（主に下半身）がときめいてやいますわ。

「そうか、碧ちゃん……でいいのかな？碧ちゃんは、格好から察するにメイドさんだよね。AKIBAのメイド喫茶でさつき僕と小夜に会つたけれど……アルバイトをしているのかな？」

「いいえ。碧はシン二十一%テレ五十%クール十%ヤン二十一%配合の真性のメイドでござります」

「真性の……メイド？それはどういう意味だ？」

ずっと僕をキッと睨みつけていた琴音ちゃんは酷ひやんに尋ねる。

「言葉の通りで『や』います琴音様。私自身で語るもの何ですが、私は体だけのメイドではなく心身ともに『主人様に身も心もお仕えするメイドたるメイド中のメイド』……すなわち、真性のメイドといつことでござります」

「真性の……！」

「メイド……！」

メイドさんがそう答えると小夜と琴音ちゃんは目を丸くして、何と答えたらしいのか分からぬのか押し黙る。

そして次に「一人は僕に視線をやり……」。

「真性の……！」

「ロリコン……！」

「ワンワンおーなのです」

失礼な方々です。

僕のどこがロリータコンプレックスなのでしょうか？見てください、この純粋無垢なメガネ的少年を……。

ほら、見なさい……僕の目は輝いているでしょう……？

「薄汚くてとても濁つた目をしてるねお兄ちゃん」

「…………ところでメイドさん、僕に話つて何かな？」

僕はメイドさんに話をふる。

まさか、話が自己紹介というだけではないのでしょうか？彼女がわざわざ聞いてほしい話は他にもあるはずです。

「『主人様、どうか私をメイドとして』主人様の側に置いて下さい

ませ……

「いいですよ

「ぶつ……」

「ぶつ…………」

僕がそう答えると、小夜と琴音ちゃんは飲んでいた紅茶を噴出しました。

「リラリラ、お行儀が悪いですよ。

「お、お兄ちゃん……！？な、何考えてこりの力ナ……！？」ギリギリ……

「き、貴様……！」ギリギリ……

「ワンシッワンシッ、なのです」

小夜は口元をヒクヒクさせ、そして琴音ちゃんは殺意の籠った目で、二人して僕の首を絞めました。
ぐ、ぐう……や、やめて。お兄ちゃん、そんな特殊なプレイは好きです。

「この身寄りのない薄汚い野良メイドの體をどうか、どうか……」
主人様、拾ってくださいまし……

碧ちゃんは胸の前で両手を組み、うるうると瞳に涙を溜め、僕に会います。

「わ、わかった、ぐう……じゅあ条件として……！」

「条件として……！？」

「キヤンキヤン、これもかあいいのです

ますます、目力が強くなる小夜と琴音ちゃん。

「……」は下手な事を言つたら死」「フリグが立ちそうです……！慎重に答えないといと……！」

僕は設定のいつぞの神様の陰謀に逆らえず、そのままブラックアウトしました。

お兄ちゅうとメイド妹（後編）（後書き）

碧みどり
(26)

第四の妹(?)。メイドさん。ライトグリーンのクセ毛のシャーテ
ヘアー。

属性：真性メイド

お兄ちゃんと吸血鬼妹（前編）

「……ストライプ、クマさん、ピンク、Tバック……ふう」

「……お兄ちゃんさあ、妹のいる前で洗濯物の下着見ながら一ヤ一
ヤするのやめてくれない？ 軽くセクハラだよ？」

朝食時。

僕は味噌汁を片手に庭に干している雨風で濡れた妹達の下着を鑑賞しながら息をついた。

ちなみに下着は小夜、比奈ちゃん、琴音ちゃん、碧ちゃんの順です。しかし、ふむふむ、碧ちゃんは清楚な顔してなかなか痴激的な下着を穿きますね、ごっくん。

「フフフ、……いやあ、この数日で随分と我が家も賑やかになつたな
と思いましてね。お兄ちゃんは感傷に浸つていてます……ふう」
「下着で感傷に浸られても……何かキモイだけだし。でも、失敗し
たなあ……天氣予報は今日は晴れって言つてたのに、これだもん……
もう今更遅いけど、部屋に洗濯物取り込むね」
「『主人様、』『飯のお代わりはいかがですか？』

そして、昨日に僕の四人目の妹となつたメイドさんの碧ちゃんは上
目遣いで『飯のお代わりを勧める。

フリフリピンクのエプロンを身につけた碧ちゃんは、『飯のオカズ
として食べちゃいたいくらい可愛らしい僕の妹なのです。『メイド
として』主人様に仕えるのは当然ですから』とか言つて、裸エプロ
ン姿で調理していた時は精神的にも肉体的にも一重の意味で悩殺さ
れそうになりましたがね（後者は主に第三者に）。

「ああ、お願ひするよ……。といひで、碧ちゃん？ 僕の事は『主人

様じゃなくて、お兄ちゃんと呼びなさいと言つたでしょ？

「あ……。」、「ごめんなさいご主人様……私、私……」

碧ちゃんは僕が怒っていると思ったのか、両の瞳からポロポロと涙を零し、美しき白き肌を濡らしていく。

違うのです、碧ちゃん。僕は別に怒っているのではなくて、せっかく家族になったのだから、そんな他人行儀にならないでほしいのです……。

「……ペロッ、泣かないで下さい碧ちゃん。僕は怒ってないよ……ただ、我が家にいる間だけは親しみをこめて僕の事を『お兄ちゃん』と呼んでほしいだけなんだ……だから、泣かないで」

「い、ご主人様……//」

僕は彼女の両の瞳から零れる聖水を人差し指で拭い、その指先を舌で舐めとった。

「うん、塩味が効いてておいしいな。僕は妹を泣かせてしまったのだから、お兄ちゃんとして泣き止ませる義務があるので……。

「……ふつ、ふふ……朝から実に不愉快な光景を見せ付けてくれるな貴様は」ふるふる

僕の向かい側の席にいる琴音ちゃんは口元を引きつかせ、身体を震わせています。……? しーしーを我慢しているのでしょうか？

「……琴音ちゃん？ もしかして、嫉妬……アイタツ、デツ、デスヨネー、ションナワケナイデスヨネー」

「……はあ、私は低血圧だ。頼むから、朝から怒らせるようなことをしないでくれ……」

琴音ちゃんは僕の眉間に向けて、箸を突き刺しました。

「うーうーん……これが俗に言つて、『天然つんでれ』といつ属性なのでしょうか……。

「へお兄ちゃんと小夜ちゃんいつもと服装が違います……今日は何かあるのですか？」

口つづ子の比奈タンは口元にじい飯粒をつけた愛らしげ顔で僕と小夜に向かつて尋ねます。

「……チユパツ、んむ。今日はお兄ちゃんと小夜は学校に行かないといけないのです。通常は男子は裸ネクタイに裸メガネ、女子は裸リボンに裸ニーソが正装なのですが今は真ぬふお」ミチツ

「つかのガツコの制服可愛いでしょー？比奈ちゃんも大きくなつたらひびきのガツコ来なよ。毎日この制服でガツコ通えるよ」

「おお……オサレです。オサレ制服を身に纏つて、比奈もお姉ちゃんのオサレガツコに行きたいです」「

比奈タンは希望に満ちたキラキラした瞳で制服姿の小夜を見つめています。

フ、フフ……お兄ちゃんは我がリアル妹の睾丸足裏マッサージ（イケナイ行為の方ではありません）のダメージのせいで絶頂しそうですよ……くっ、くく……ウヘッ。

「うわあ、何つ……お兄ちゃん？そんな朝からそんな口からだらしく涎を垂れ流して……。アヘ顔を私に見せないでよーもうキモイ！ホント、キモイよもうー！」

「き、貴様あ……ど、どつやら貴様は本当に死に急ぎたいようだな……」「ふるふる

我が妹は実の兄である僕をまるでその辺の道端に侘しく生えている
タンポポを見るような瞳で見つめています。

一方、味噌汁を啜っている琴音ちゃんは箸をテーブルの置き、懐か
ら何かを取り出そうとしています。

ウフフ、何でしじうか、この理不眞。でもそんな理不尽な妹の行為
も僕はすんなり気持ち良くてたっぷり受け入れるのでしょうか。気持ち
よくたっぷり受け入れるのでしよう（大事なことなので一回言いま
した）。だつてお兄ちゃんなんだモン。

「モグムグモグムグ……我ながら、今日の白米の炊き加減が絶妙で
『ござい』ます、もふもふ」

「碧ちゃん、タイ米のお代わりお願ひするのです」

「比奈様、タイ米ではありません。正しくはブレンド米でございま
す」

【 side sister????】

雨天のとある住宅のとある一室にて。

イケナイ本やイケナイ道具一式やイケナイゲームやイケナイティッ
シュが散乱している部屋に小柄のいわゆる幼女体系で赤髪ロングの
女の子と金髪のロン毛マンがいた。それを人はよそ様の住居侵入と
呼ぶが彼女らは気にしない。

「ヌハハハツ、ここが今回の雄豚の豚小屋と言つ訳だなつ 小次郎！」
「メル様、雄豚ではございません……正しくは、『対象者』かと。
そして私は貴方に仕えるメル様の白濁液で汚れた薄汚い雄豚かと」

ナデナデ

小次郎と呼ばれたロン毛マンは笑みを浮かべまるで我が子の頭を撫でる様な手つきで優しく、メルと呼ばれた少女の尻を愛撫した。

「ひつ、ひやつ……なつなな……！何、勝手に私の高尚な尻を触つてんだボケエ！」

「触る、ではなく正しくは愛でるかと」ナデナデ

「ひつひつひつひつ……ひやつ、いいいいつまで触つてんだ変態野郎！」

「変態野郎、ではなく正しくは変態紳士かと」ナデナデ

「ひつひつひつひつ……！真顔で反論すなっ」

真つ赤な顔で抵抗するメルの表情を見た小次郎は繭を八の字にしてガックリと頭を垂れ、渋渋とメルの尻から手を離した。すると、小次郎はおもむろに己のズボンのチャックに手を触れ、下げる。

「メル様、そろそろ私の肉棒を準備してもよろしいでしょうか…？」

「ジー

「なつ何だ肉棒ってえ…つづうわつ！何故チャックを下ろす！？わ、私に汚いブツを見せるなつ！！！」

「何故と申されましても……メル様が求めたのですから」

「も、求めどらん！そんなえげつないもの！お前は私の何なのだ！」

「愛玩具（夜間専用）かと……ぼつ／＼／＼

「よし、歯を食いしばれ貴様あ！一生、高野豆腐も食べられぬよう粉々に力チ割つてやるわあ——————！」

小次郎は『ちつ』と舌打ちをし、仕方なく一度取り出しかけた己の肉棒をしまう。

その際、『今お前、舌打ちしただらつ…？』とか横で色々といひあがめ

「ごちや聞こえてきたが、小次郎はキツパリ無視して無事、愚息を鞘に収めた。

「ふう……メル様、そろそろ対象者とご対面された方がよろしいかと」

「急に営業面になつたな貴様……まあ良い。ご対面？ふふんつ、バカモノ。吸血鬼の私が何故、下等な人間共と対面しなければならぬのだ？馬鹿馬鹿しい……」

「メル様、その鼻の抜けるような偉そうな鼻音は下品かと。あと高飛車のような馬鹿面とキンキン声が大変鼻につきますので即刻止めた方がよろしいかと」

「うわああああん、何なんだ貴様は！さつきから何様なんだ貴様は！帰れえ！給料ドロボー！」

「メル様の眷属でござります」

眷属とは……。

一般的には血縁者、つまりは親族や一族を指すことが多いが、ここで言う眷族とは少しばかり違う。

不死族の一種として人間の生き血を糧に生息する吸血鬼はその性質からか、この世を生涯共にする友の存在がない。そのため、必然的に孤独を愛し、孤独を糧に生きる。しかしながら、中には当然孤独を忌み嫌う吸血鬼も存在する。そのような吸血鬼はこの世を共に生きる友を求めて、人間の生き血を吸い、その人間を吸血鬼化することで”絶対の友”を作る。それが小次郎が言つた眷属である。

絶対の友と言えば聞こえは良いかもしねないが、要するに体のいい下僕である。

何故ならば、眷属は必然的に吸血鬼を主人として崇めなければならず、主人の言う事は絶対従わなければならないからだ。

「……だつたらチュー・チュー吸わせろ。」口にストローもあるから

ら

「嫌です」

「うわああああん！もう死ねお前！とつとと私の前から永遠に消え去れカバ――――！」

「嫌です」

「お、お前はホント何なんだ！？嫌がらせか！？もしかしてそれは嫌がらせのかつ！？」

「ハハハ、嫌がらせだなんてとんでもない。人聞きが悪いですよメル様。嫌がらせではなく、正しくは愛のある嫌がらせかと」

「お前のような失礼な優男なんぞの愛なんか欲しくないわハゲ！そんなもんドブ川に捨ててやる！」

「じゃあ嫌がらせで」

「うわああああん！お前、もう帰れよぉ！頼むから帰ってくれよお！」

！

.....。

まあ、絶対的に吸血鬼と眷属の関係が主人と下僕であるとは限らない。

メルと小次郎のように人間とチワワがじゅれ合つてこりよつた仲の良い関係を築けている場合もある。

というより、吸血鬼の中にも階級があつて……（中略）……要するに、メルはまだ吸血鬼としては幼いといつより、低レベルな存在なのだ。

「さて、メル様いちぢりもこれくらいにしておいて……。メル様、我々は例の計画のためにここにやって来たはずです。……対象者に会つていただきないと何のためにここにやって来たのか分かりませんよ」

「もういい、お前の失礼なヴォケには金輪際、つまらまん。嫌だよ

……何で私がこんなブサイクなメガネマンの妹にならなきゃならないんだよ……大体このふざけた計画の立案者はあのセクハラおやぢだろ？私はあのファグおやぢの言いなりなんて絶対聞きたくない！ヤダ！絶対ヤダ！！

メルは対象者の顔が映った写真を明後日の方向に放り投げ、部屋の畳の上で仰向けで横になり手足をばたつかせる。

その姿は傍から見れば、赤ちゃんが『まあー俺つちに生乳ーくれようー』と駄々をこねているような感じだ。

「子供ですか貴方は……ですが、今朝メル様はノリノリのアフォ面でこの家に侵入したじゃないですか」

「お前今軽く私の事を馬鹿にしだらう。まあいい……ノリノリだつたのは、あれだ……氣分だ、氣分。笑ともでも初登場だと何か浮かれる彼奴がいるだらう。あれと同じなようなものだ」

「ブツ」

「笑うなばかあ！！」

メルや小次郎がこの部屋に外から侵入できたのは本日の天候が雨天であるためなのは言うまでもない。

吸血鬼や眷属は太陽の光を忌み嫌い、触ると死滅してしまうからだ。それは太陽の光の強弱によってダメージは多少変化するが、弱点ということに変わりない。

「……ところで、小次郎。私は腹が減ったぞ」

「飲ませませんよ」

「貴様という奴は私の眷属のクセに何ちゅー主人を大切にせん奴なのだ……まあよい、今は血的なモノが欲しいのではない。腹が減つたのだ……わざとメシを寄越すのだ小次郎」

ちなみに、吸血鬼は糧は血だけである。

基本、吸血鬼は人間の餌は食べません。あしからず。

「ジリゾ」

「お前にはそのくしゃくしゃに丸められたティッシュが食べ物に見えるのか！？うわっ、なんだこれつ、くさつ、イカ臭つ！何だこの不快なブツは……ちつさと捨てんかそんなモン！！」

「くんかくんか……。うーん……懐かしいスメルです。香ばしいですね」

「香ばしいものか……う、うえええ……氣分悪……その変なスメル嗅いだせいで一気に食欲なくなつた……。私はぐでえーっと横になるうう……そして寝る。ジリゼ、今日は雨だけど昼間は行動する気も起きんし……」

「お休みなさいませ、良い夢を……あ、しまつた。メル様……」

「スー……スー……」

「……おやおや、もうおねんねしてしまいましたか。……まあ、可愛い寝顔に免じてこのまま寝かせときましょうか。それに、この方が何かと計画に都合が良いですからね」

小次郎はそう言いながら、部屋の窓枠に足をかけ、ベランダに移り、雨の街中に消えていった。

お兄ちゃんと吸血鬼妹（後編）

【 side midori】

ご主人様がご登校されている昼間にお家のお掃除をしましょう。
真性メイドシスターとして雇つて下さったご主人様に私はこの身を
奉仕しなければなりません。

元より真性メイドとはご主人様のご要望のみならず自ら主体性を持
つて行動しなければたちまち段ボール箱にポイッされちゃうかもし
れません。碧はもうあの頃のような捨てメイドに戻りたくないの
です……。

「…………ひ、ああ、お掃除しましょう」

私は少しこみ上げてくるものを覚えましたが、気を取り直して右手
に掃除機を、左手にゴミ袋を装備し、一階へ向かいます。というの
も私が最初にお掃除するべき場所は何処かと考えた結果、ご主人様
のお部屋がすぐに思い浮かんだのです。ご主人様のような性少年に
とって、ひとつやふたつ人に見られたくないものもあるでしょう。

ですが、それはそれ、これはこれ、あれはあれ、メイドにひとつご
主人様のプライベートは存在しません。そんなものよりも大切なこ
とはご主人様のお部屋から太郎がわんさかもつこり大量発生する前
に駆逐、もといお掃除しなければなりません。真性メイドは太郎と
セロリー君は大嫌いなのです。

「本日のお掃除拠点に到着しました」

私は『おにいちゃんのおへや』と書かれたプレートの貼られた扉の

前までやつて來ました。

ここがご主人様のハウス。ここがご主人様の檻。ここがご主人様の愛の巣。

私はさつそく、ドアノブを回し手前に引きます。

「…………んつ、んつ…………んう…………あ、あれれ？」

開きません。開け柚子胡椒。開きません。

不思議に思つた私はドアノブによくよく視線を送ると鍵穴を発見しました。とすると、ご主人様はこの扉を施錠しているということになります。……お部屋の中に見られたくないものがあるのですね。仕方ありませんね……。

「ソオイ！！」ヴァキ！！

私は扉に正拳突きをお見舞いしました。ちょうど拳分の穴がすっぽり開き、外側から中に手を入れることができるようにになりました。少しランボーになりましたがこれでようやく心置きなくご主人様の豚小屋を思いつきりお掃除できるというわけです。私は穴に手を入れ、外側から開錠しました。

「…………こほん。ご主人様、失礼します」こんこんこん

私は丁寧にお辞儀をし、ドアノブに手をかけ手前に引きました。メイドとして、ご主人様の部屋に侵入する際は三回ノックと失礼しますは基本中の基本です。それはともかく、今度こそするつと気持ちよく扉は手前方向に開きました。……何故か少し高揚感。私はそのままご主人様の豚小屋に侵入し、お部屋の光景を目の当たりにしました。当初の予想通りの散らかりようにまた少し快感。

「……むう。しかし、これは本当にビンから手をつけたら良いので
しょうか」

そひらじゅうに転がっている謎の丸められたティッシュ。ゴミ箱にも何故か大量に丸められたティッシュで溢れかえっています。思春期の男の子のようにエロ本を隠す、といったことも面倒なのか隠すきさらさらないのかこれ見よがしにベッドの上に散乱しているエロ本。やはりご主人様はド変態ですね、実に良いことです。性に明け暮れた男の子は定期的にアツーしなければ根っこから腐っていくとのこと（まあ、真っ赤なウソなのですが）。それに手の運動にもなりますし、絶頂に上る瞬間、エレクトを発すると昔、パパ様から聞いたことがあります。大いに結構、エレクトボンバー。

「……ですが。まさかご主人様がダツ ワ フを所有していたなん
て……」

「くかーくかー」

驚きです。びつくりこんです。

部屋のフローリング仕様の床に寝そべって、可愛らしいいびきをかいている幼女を一匹発見しました。

……マツバ。

「……とりあえず。たいーほー。これはたいーほどっー。ぴっぴっぴー
！」

「くかーくかー」

とりあえず、驚いてみました。

むむむ、しかしこれはまたレヴェルが高いですね。等身大の局部穴あきダチイフまでは予想していましたが、まさかリアルダツワフだなんて……。この事がもし、お嬢様もとい小夜様の耳に入

つてしまつたら……。

『お兄ちゃんなんて……お兄ちゃんなんてつ、ヒロティックピクロス……』ぱちこーん
「ぶふひ」

不覚。

いけません、ついご主人様の面白不幸を思い浮かべてしまいました。
碧のばかばかばかばかー。

とにかくそんなしようもないことを考えている場合ではなく、今は
目の前のマツパ幼女をどうするかです。

このまま、ここに放置しておくのはあらぬ誤解……というより、ご
主人様の輝かしい経歷に一生の傷をつける結果を招いてしまつかも
しません。それは例えご主人様が間違いを犯したとしても、真性
メイドシスターの私がこの汚れきった手でもみ消さなければならな
いのです……！決して、家政婦に見られてはいけないので……！

だだだだん だだだだん

あつ、火サス。

「兎にも角にも、どこのこの幼女を隠しまじょうか……」

人一人を隠す場所はこの狭くて汚くて臭い豚小屋には見当たりませ
ん。

……土壤に隠す？それでは本当に火サス展開になってしまふではあ
りませんか。

それはいけません。一番良いのは、ご主人様の罪が暴かれず、なお
かつマツパ幼女を安全に収納できるスペース……。

.....。

あつといつ間に夜。

【 side ONHITYAN】

「今日もお勤めご苦労様です」

僕は自分の部屋で、机に向かいそう呟いた。

これはあれです、自分に対する自分への賞賛の言葉といつやつです。
しかしあれですね……週明けの学校といつもの本當に疲れます。
今日も今日とて、上履きに画鋲、戸を開くとチヨークの粉爆弾に被
災、机にうん の落書き、ちょっと気持ち良いシャーリンツンツン
攻撃、ストレッヂがいつの間にか電気按摩、昼食が日の丸弁当入れ
替わり事件などなど……クラスの皆様のゾンデレ攻撃に心も身体も
クツタクタです。

「そんな疲れ切った肉体を癒すおススメのゲームはこりがり

『お姉ちゃんと妹のすみことぜんぶ。』

タイトルどおりのあれな……つまりはコリュリにしちゃーうづ的な
ピー禁ゲームです（ピー禁とは大人の事情で成り立っている……）。

この間、小夜とAKIBAに行つた時に偶然見つけた一品です。お金は諭吉さんが一枚ほど消えていくという結構な痛手で入手したレアもんですが……今日は「これでまた一步、お兄ちゃんは大人の階段に上るうかと思つます。

「しかし、容量が10GのCD-ROMとは……なかなか力オスなゲームですね」

そして僕はノーパソにゲームディスクをセットティングし、インストールを開始しました。

(三時間経過)

「……まさか。こちやこちや丘合ゲーと思つていたのにエラーなゲームだったとは……」

正直お兄ちゃん、がっくりです。

しかもピー禁ゲームの恐ろしいところは、途中まではこちやこちやゲームだったのです……。

それで、あのですね……。もうそれはもう傍から見ても、恋人同士な感じ……二コ二コした人たち的な言葉でいうと『お前らもう結婚しちゃえよWWW』『砂吐きます』『全世界の俺がないた(丁一)』『近親姦ですね、分かります』などなど……。なのに……。

『お姉ちゃん、サヨナラ。もつあんたにはついていけないわ、ペッ』

……は?

最初はバグだと思いましたよ。いや、もうメーカー訴えられるレベルですよこれいや冗談でしょでしょ冗談と言つておくんなまし!で……。進めましたよ、そして画面に出た文字。

『end ティーン

……ディスク叩き割りたい衝動に駆られましたよ。うーん、萎えました。

「……はあ、しかしさかクソゲーだったとは」

……いけません。

もう、忘れましょっ……。そして僕はディスプレイから目を離し（正確には逸らし）、部屋を見回しました。ところで今日はやけに部屋が片付いていますね。ドアも不自然に拳分の大きさの穴が開いていましたし。うーん、何か落ち着かないけどまあいいですか。今日はもうお兄ちゃんは疲れたです、早く寝ましょっ。そして僕はヘッドフォンを外し、床につくためにベッドに向かいました。

『む……ぬ、あ……ふあ……よく寝た、ぞ……』

どこからか幼女の声が。

『ふあ……おおい、こじろ、こじろ～ど～ど～る……って、何だこのはあー?ぐ、暗いつ!暗いぞー暗いぞーおー』

『お、おいつつー何だつ!こはー?だ、誰かいないのかー?おおい小次郎!ーー、暗い!暗い!そつそれに……狭い!暗くて狭くて怖いよーー』

『た、たしゅけて……。ほんと、ほんとこは暗くて狭くて怖いんだよ、誰か、誰かあ……ひっく』

……これほど見ても押入れの中から聞こえますね。
僕は内心ドキドキが半分、ムラムラが半分の気持ちでそつと部屋と
押入れを隔てる戸を開きました。

「たしゅ……え？」
「え？」

押入れの中から全裸の幼女が出てきました。

「な、な、なな……！」
「お、おふう……」
「なつ何だ貴様は！－なつ何で貴様は下半身マツパなんだ！－」
「だ、ダッワフ……ですか？」
「だつ誰がダチイフだばかあ！－みつ見せるなそんな汚いブツ！－」
「な、なにおつきしてんだ！－さつさと隠せえ！－」
「す、既に中古……ですか？」
「び、びつちとはなんだ……よく分からんが、早くブツを隠さないと噛み切るぞこのばかあ！－」

噛み切られるのはすぐ怖いので、僕はズボンをもう一度履き直しました。

し、しかし……女の子が全裸、ところの田のやり場にすく困るので服をあげよう。

「なつ何でスク水なんだあ！もつとまともな服を渡せばかあ！
「い、いや……ちょうど妹のお古があつたからね。それがいいかな
と……」

目の前にいる女の子は涙目で僕に抗議してくる。

う、うーん……しかしさかぴつたりなサイズだとは。確か、小夜
が小一くらいの頃に使用していたスク水ですよ？

「妹……？何で貴様が妹の水着を所有しているのだ……」

「まあいいじやないですか。君は幼女ですし、ぴつたしかんかんな
サイズです」

「だつ誰が幼女だばかあ！！私は今年で齡一百歳の立派な吸血鬼だ
ぞうーー！……つて、お前何かどこかで見たことあるような顔だな……
おかしいな、こんなブサイクな顔一度見たら忘れないのに……」

「…………」

言葉の暴力って……こんなに人を傷付ける刃となるのですね、ぐつ
すん。

「しかし……ふふ、人間。貴様は吸血鬼の私に出会ったのが運の尽
き、だなつ！さあ、さつそく貴様の血を「きゅ」きゅ飲ませろおー！
！私の眷属もとい下僕にしてやろうつー！…ヌハハハハツー！…さてつ、
んちゅつとな」

そう言うと女の子は僕の裏ス…じやなくて首筋にキスをしてきた。
は、破廉恥な……なんて、なんて破廉恥な子なのかしらー！なん
て破廉恥な子なのかしらー！
あ、ああ……そうそう、首筋に甘噛み、あま……噛み。

「チューーチュー、チューーチュー」

「んぎいいい……もおおおおお……ぢいいいい……」

「んっ、んく……きりきり……なつなんだこいつ……？」

あ、ああ……甘、噛み……なんて、何て甘美な響きなんだろ……。
僕は彼女の葉の感触のあまりの気持ちよさに思わずエレクトしてしまいました……ああ、なんてはしたないはしたない。

「ふつふふ……しかし、これで貴様も私の眷属式号になつたぞ。さあさつそく……」

「御嬢さん……名前は！？」

「はうつ！？ いっしきなりなんなのだ貴様は！？ め、メル様だ」

「メルちゃん！ よく僕の話を聞いてほしいんだ！」

「う、うん……」

僕は両手で彼女の肩を強く掴んだ。彼女は目を丸くして、僕を見つめている。

ふつふふ……見つけた、ボクの、僕の……。

「僕のう、いや……お兄ちゃんのう、妹にう、なつてう、下さうう……！」

「うついやだつ……お前みたいな変態で、ブサイクな男の妹になんか……うつて、お兄ちゃんの妹……あつ、あー……お、思い出したぞ……お、お前……あのファーゲおやぢが言つていた対象者の……！」

「！」

「だつダメですう。メルたんは永遠に僕の妹ちゃんなのですう……

「……ぺろんぺろん……！」

「いいやだいやだいやだあ……く、くそう……小次郎……あ、野郎、私を騙しやがったなあチクショ……！」

ボクにまたもや妹が（半強制的に）出来ました。

お兄ちゃんと吸血鬼妹（後編）（後書き）

メル（200）

第五の妹。赤髪ロング。出来損ない吸血鬼。

属性：吸血鬼

お兄ちゅやんと「次元妹（前編）

「じきえれ」

「そわそわ、なのです」

「もふもふ」

「ふわふわ、なのです」

……。

「……なあなあ、わよちー。じりしじ、わからあの男と比奈はなんも映つてないテレビの前でそわそわしているのだ？もふもふつ……ところでこのじりあんうまいな」

「ん…まあ、十九時になつたら分かるよ。とにかくさつきから気になつているんだけど、どうしてメルメルは私のお古のスク水姿なの？もしかしてそういうケがあるの……？」

「ぐつ……こ、これは……あ、あれだ……きゅ、吸血鬼としての私の正装だ！ふふんつ、じつだあまいつたか！！」

「どひつて……えつと、碧さん？」

「はい、メル様は容姿淫乱で頭の弱いとも眼にも入れられないほど可哀想で、でもそれでいて馬鹿な子ほど可愛^{マヌカ}いと申しますか……とにかくそんな一家に一合なくてはならない疫病神^{マヌカ}みたいな雌豚です」

「ふつ、ふふんつーそうだつ分かれば良いのだ！分かればーわか……ふあ、ふあっくしゅんー！」

僕と比奈ちゃんが未だブラウン管仕様の我が家のレトロテレビの前でソワソワしながら、今か今かと時間を気にして待つていると料理をしている小夜とコタツでぬくぬくしているメルちゃんと浴槽を洗っていたのか腕まくり姿の碧ちゃんの三人が台所で談笑をしている

ではありますんか。僕もシスターーズといひやこひやしたいのですが、何分今は先行しなければならない事情が……。

「お、お兄ちゃん！コノマキッカリ、十九時になつたのです……は、早くつ、早くテレビをつけます……！」

「フオ――――お兄ちゃんのスイツチオンんんん――」ポチッ

僕は焦る比奈ちやんに催され、素早く手元にあつたりモコンを操作しテレビの電源を入れました。

すると、テレビの画面に映し出されたのはおハゲのおぢ様達がタコのよおな真つ赤な顔して、テレビ的に禁句な言葉で互いを罵り合つている姿が映し出されました。何やらおぢ様達は政治的な討論をしていらっしゃるようですね。

「あ、ちがうですお兄ちゃん！」んなとつに精も根も枯れ果てたおさん達が自己快感のために罵り合ひMなハアハア番組は求めていないのです……はやくつ、はやく良い子の6ちやんねるに切り替えるのです……！」

「うつ、しまつた……うつ……リモコンに……あつ、手が……手が汗で滑つて、に、にぎれな……くそつ、我の性なる手中にリモートコントローラをおおお！キイ――――！」つるつるつ

「な、なに……？一体今から何が始まるのだつ――？」

「しつ、メルメル黙つて。見てたら分かるよ」

一瞬の動作の遅れが命取りになる！それは戦場に限らず、平和なNIPPONでも言えること！

僕は掌で搔いた汗を服で拭い、再び震える手でリモコンを握りつぶすかのような握力で掴み、すぐさま良い子の6ちやんねるに切り替えました。ふ、ふう……お兄ちゃんは無事、任務を遂行しました

一万歳……一万歳……！お兄ちゃん、あっぱれ……！

『魔法処女まじかる プリン』

「おう、おうおうお～…………」

「あう、あうあうあ～…………」

6ちゃんねるに切り替えると、ピンクとハートできゅあきゅあでプリップリントンな感じのかあいらしにアニメのタイトルロゴがアップで映し出されました。僕と比奈たんはそれを見て、あまりのタイミングの良さに感慨を覚え、両の瞳から涙が出ました……。ああ、プリン……あたしだけのプリンちゃん……。

「何なのだ……あれ？（汗）」

「まあ、その……何ていうか、ね。タイトルだけでも子供的にアウトだよね、あれ」

「そうでござりますか……なら、『魔法ビッチまじかる プリン』とこうタイトルを碧は提案させていただきますが、いかがでしょうか小夜様？」

「いや、私に提案されても……。ていうか、もつと酷くなつたような気が……」

何だから文句を言いつつもテレビに釘付けになるシンデレシスターズにお兄ちゃん何だか甘くて酸っぱい性少年のよつな気分になりました。んもう！あの子達ったら、見たければ素直に言えばいいのに！そしたら、お兄ちゃんの膝の上に乗せて見させてあげるの！

『プリップリップリップリップリップリップリップリップリップ』

「「プリップリップリップリップリップリップリップリップリップ」」

『レロジレロジレロジレロジレロジレロジレロジレロジ』

「「レロジレロジレロジレロジレロジレロジレロジレロジ」」

『ペロッペロッペロッペロッペロッペロッペロッペロッペロッペロッペロッペロッペロッ』

「ペロッペロッペロッペロッペロッペロッペロッペロッペロッペロッペロッペロッ」

『ネロッネロッネロッネロッネロッネロッネロッ』

「ネロッネロッネロッネロッネロッネロッネロッネロッ」

そしてタイトル「歌」の後は、お決まりの魔法処女まじかる プリンのテーマソングが始まります。

これがまた、神ソングでして……とにかく一度聞けば、思わず口ずさみたくなるような、思わず他人同士でにゃんにゃんしたくなるような……甘くてねつとりしていて、君子危うく近寄らざ的な、そんな思いを良い子の子供達に与えてくれる元気な歌なのです。もちろん、この歌が流れだしたらふあん的なおったきーは当然の如く歌いだしますし、僕と比奈ちゃんも元気な声で陽気に歌います。

「何か段々と頭が痛くなってきたのだ……「うう、何だこれは……私はもしかして地球外生命体から謎のスタンド攻撃を受けているのかえ……？」

「いわゆる電波ゆんゆんそんぐ」とこつやつでしょつか……確かに思わず口ずさみたく、ネロネロペロペロレロレロ……」

「碧さん、口ずさまなくていいから……ちなみに、あれがあと十回くらこ続くからね」

「なつなにーへ、苦痛だ……地獄でしかない。わ、私の魂は一体何処に行つてしまひのだひつ……？」

ふふふふ。

今はまだ君達シスターーズはこの曲の味を覚えられる年齢には達していないからね。

そのうちそのメルちゃんが言つ苦痛でさえ、快感に変わりそのうち

体が勝手にこの曲を求めてしまつようになりますから。……ある意味、タバコやお酒と似たような依存性があるかもしれないですね。ふふ、ふふふふ……。

「お兄ちゃん！ それそり、プリンちゃんの本編が始まるのですよ！」

そしてオープニングが終わり、本編に入ります。

僕は比奈ちゃんと同じく、テレビを呪い殺す勢いでジッと凝視します。

『あばばばば！ 私はムツリケセランパセラン！ 私のトロピカルな地肌の餌食になりたいお子様はいらっしゃーい』 カサカサ、カサカサ……

（きやー、いやー、うきやー）

何故か海の家の前に今にもビーチクの一つや二つ出しそうな雰囲気の水着で仮面姿のおば様が、ブリッジをしながら砂場にいる幼女達をゴキブリのような速さで追いかけまわすという何ともシユールなシーンから今回のまじかる プリンは始まった。余談なのだが、二十分放送で中間のCMが入るまでの最初の十分間はプリンの宿敵、ケセランパセラン（またの名を怪人）の登場及び仮面ラ ダーでいうところの人間を襲うシーンで占められている。残りの後半は僕らの主人公、魔法処女まじかる プリンが華麗に、それでいてエロティックに登場し、ケセランパセランをドつき回すというお決まりのパターンとなつていて、

『若い子の肌が欲しいい！あたしあ、若い子の肌が欲しいんだよお

おお』力サカサ、力サカサ……

『いやああああ、庄司さん助けてええええ！……』

『加奈子おおお……逃げるおおおお加奈子おおおお……』

もつとも単に前半のシーンが全部ケセランパセランの襲撃だけではなくドラマティックな展開もちゃんと用意されている。例えば、このようなシーンで一人逃げ遅れた庶民である加奈子がケセランパセランに襲われそうになる。そこには、助けてくれる人もいない、周囲に人がいても見て見ぬふりで我が身のことを第一に優先して、逃げていく者が大半を占めるだろう。それは決して、夢も夢物語ではなく、リアルな我々社会を揶揄するような製作者サイドの意図を感じ取れるかもしれない。

『いやついやついやああああああああああああああ……庄司つ、庄司や……あ……』

『かああああああああああああああこおおおおお……』

男の声は既に彼女には届かず、それでも男は距離を取りながら叫び続ける。

矛盾、そこには矛盾が生じる。助けたい、助けたいのその一心なのだが、実際に行動に移せない……。これが矛盾、すなわち男は偽善者なのだ。表面上は善で取り繕つっていても結局のところは、我が身を優先する……しかし、誰も彼を責めるものはいない。何故なら、それはその男に限らず誰しもが心の奥底で眠っているかもしれない心情だからだ。ただ残るのは、喪失感と後悔。荒んだ心は社会をダメにする、しかしそんな社会を明るく陽気に変えていく「一つ」という名のコンセプトで登場したのが……。

『ああ……かなつ、かなあ……いお……ううううう』

『お兄ちゃん……大丈夫、あのお姉さんは必ず私が救つて見せるから…』

『丁寧』

砂場で蹲る男の肩を叩き堂々と登場したのが、我らがプリン！！
人間名でいうと、プリン・カスター・ド……一見、幼女にしか見えない容姿なのだがたちまちプリンの力を借りて変身すれば魔法処女に大変身つ、ケセランパセランなんていとも簡単にやつつけちゃうゾツツツ な展開になることテンプレである。

『待つてて、今すぐ着替え……あ、あれれ？』

『え、プリン……？』『どうしたんだつプリン！？』

しかし現実は厳しく、アニメの世界でも容赦しない。プリン・カスターは確かにプリンの力を借りれば一時的にムテキな感じになるのだが……。

『お、お兄ちゃん……』、「メンネ。ふ、プリン……装備一式お家に忘れてきちゃつた！ テヘッ』

当のプリン・カスター^ドはお転婆でおつちょこちょいな幼女なのでした！

ピンチだプリンちゃん！？どうするプリンちゃん！？戦えプリンちゃん！後半へ続く。

「「痛つ……」「

「む。小夜にメルちゃん、殴ったのですか?どこか身体を痛めたのですか?どれ、お兄ちゃんが診てあげますから、脱ぎなさ……あんつ?」ガスツ

コマーシャルが入ったところでテレビを見ていた小夜とメルちゃんが顔を歪めて痛いとおっしゃったので心配して近づいたところ、小夜の繰り出した蹴りが僕の下腹部を的確に命中しました。く、くうくく……これは、い……こです、うふふふふ、ふふふ……。

「これせ……予想以上に……。……」

メイドの體ちやんも何か言いたげな顔をしていますが、田を開じそれ以上何も言いません。

予想以上に……こ続く言葉はなんなのでしょうか?

「お、お兄ちやんつ……もうすぐ、プリンの続きが始まりますよ!」

そして、小夜やメルちゃん、體ちやんの態度を不思議に思ってながらも比奈ちやんに催され、僕は再びテレビの画面に目を向きました。

お兄ちゃんと一次元妹（後編）

תְּהִלָּה

「マーシャル」という名の一 分間のインターバルを終え、テレビに映し出されたのは水着姿のプリンとブリッジしているケセランパセラントが向かい合つて いる光景であつた。しかしお茶田さんな プリンちゃんはお家に装備一式を忘れて しまつたので、変身できずその場でたじたじ。ちなみにこういったお茶田な プリンちゃんは随所でよく見られる場面であるので、おつきー的な人から見ればモエモエとか発狂する場面……まあ、そんな感じである。

『あはははははははは、つるぺた幼女のむつちつ地肌があたいを若々
しい肢体へと変えて、へへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへ
ろん!』

いいやん……さ、さわらな……あああああ、き、きもちわる
いいい～～～！わ、脇腹を舐めないでえええ～～～！（幼女、
と見せかけて実は男の娘な子）

プリンが手を出せないのをいいことに、ケセランパセランは容赦なく一般人に牙を向ける。

今回のケセランパセラン（名は熟女キラー。以後、この名で記述する）の襲撃は『触る』と『舐める』の二つ。

『触る』は砂まみれ、何かの油まみれな手で身体全体（主に上半身）

をベッタベッタ触られまくる。不快感この上なことは言つまでもないだろ？。

『舐める』はもはや語るも嫌な攻撃で、そのあまりのおぞましい光景はソフ倫（正式名称はコンピュータソフトウェア、げふんげふん）やぴい－てい－え－のおば様方に強く反対されるほど問題シーンである。英語表記にしないのは語り手がおば様方に寝込みを襲撃をされる恐れがある故の判断であつて、悪しからず。

『う、うう～～！ムカつくムカつくムカつく～～！…只の熟女のくせにチヨーシにのつてえ……プリンむかつくんだからあ～～～お兄ちゃんつづ～あいつ殺つちやつて！～！』

『えつ……ええ！？お、俺が！？あいつを犯つけやつの…？』

プライドをズタズタにされたプリンちゃんが、一般人にハつ当たりのように熟女キラーへの攻撃を支持することも、もはやお決まりのシーンでオタクばんざいな感じである（（；、ヽ、ヽ）こんな感じである）。

『ウポー、プリンーーーお家から装備一式を持ってきたウポー！…』

『あつーーあたしの装備ー！』

しかし、このままハイローですかと番組終了のお知らせとなる程、アニメスタッフも鬼畜ではない。プリンがピンチの際に駆けつけるお助けマスクットキャラ、ウップルの存在を忘れてはいけない。ウップルはすべての命を生み出す石「なんたらストーン」を守る使命を帯びた「選ばれし童貞」で、アップルをストーカーする形で光の園から虹の園……えつ、どこかで見たことあるキャラですつて？それは、あれです。彼は派遣社員ですから。

『ウップル～』

『プリン～』

感動の対面。

彼が、光の園からやつて来たストーカーマスコットが相方のプリンのピンチを救つたのです。

『氏にせりせえええセクハラマスコットオオオオオオ…』

『あぴゅつ』ドスツ

……。

お助けマスコット、ウッブルをセクハラと勘違いしてドツベ場面ももはやこのアニメのお決まりシーンである。従つて、彼、ウッブルは一十分放送枠でわずか三十秒しか活躍シーンを与えられていないとこ、う色々と不憫なマスコットキャラなのである。

『もあ～～、プリンのコスプレ……もとい装備をくんかくんかつて鼻で味わっていたのね！ほんとウッブルはエッチだよ！変態皇太子！ドスケベ太郎！ゲテモノ！肥溜めに落ちて窒息死すればいいのに！ふんっ』

『お、おこつそんなマスコットと二文芝居している場合じやないだろ！？って、おいおい！コスプレとか普通に言ひちゃつたよこの娘！』

『！』

ついつい放送禁止用語がポロッと玉ねぎの皮が剥けたよこの娘の
お茶目つ氣所以である。

『任せてつお兄ちゃん！あんな熟女、プリンがコテンパンにやつつけちやうんだからつづ！それで…？あいつ、どうこうのー…』

『あ、あや…』

『ああ……この真夏の太陽があたいの白き気高きもつちりもつちもち
肌をこんがり焼いてくれるのよお……わゅーわゅー』

プリンが田を離した隙に、熟女キラーは若い肌を堪能しきつて疲れたのか、ビーチパラソルの下で日光浴を堪能していた。ぶつちやつけ、只の熟女であることほこりだけのない・い・ちょ！である。

『あ、あの野郎……ジュースなんか飲んで余裕綽々だぞ……お、おいつプリンビツするんだ?』

『大丈夫っ、今から着替えて…………お兄ちゃんのセクハラ官僚！』
『ぱあ！』 バキッ

『アツチ向いてて！お兄ちゃんのバカツ！！』

『いちいちちち…… 何も殴らなくてもいいだろ…… 頸の骨が外れるか
と思つたぞ』

言葉だけではなく、すぐに手を出しからうのも素直になれないプリンちゃんの魅力の一つである。そして、人間から魔法処女への変身は視聴者が一番期待するであろうと思わずボッキツキしそうなあぼーんなシーンの一つである。しかし、あくまでもこのアニメは「ホールデン」でお送りしているため、モロ出しはNGである。そのため、パティオツや割れ田ちゃんは巧妙に隠しているので悪しからず。

テカツ

変身シーンは大げさな演出と台詞で華やかに彩られているが、ぶつ
ちやけプリンがコスチュームに着替えただけであるのも大人の都合
所以である。何の夢も希望も与えない現実的な社会を子供達に教え
るアニメとしても魔法処女まじかる プリンは絶賛大好評である。

『イツクよー！てりや ああああああ――ラ ダーキック！…』

『あべしつ』バキッ

プリンが放ったライーキックは油断していた熟女キラーの土手っ
腹に見事直撃し、熟女キラーは数十メートルほど飛ばされた。

『うぐつ、うぐぐぐ……』、この、不意打ちなんて卑怯……

『ラ ダーちょつぷ！』ズビシッ

『いたつ、ちよつ、おまつ』

『ライー凸ピン！…』ピーン

『あつ、まつて、たんまつ、ちょつ、ほんとつ』

『イダーびんた！…』バシッ

『うえつ、いたつ、ほんとに、いたいのつ』

『ラ ダー頭突き！…頭突きい！…』ゴンシ、ゴンシ

『びえええ、ごめんなさい』めんないいい、もう一度とこんな
真似しませんからあ～～』

こうして、プリンの攻撃により白旗を上げた熟女キラーは傷付いた
身体を引きずって、そのまま白のワゴンで逃走した。かくして、魔
法処女プリンは今日も悪を殲滅して、平和なビーチを取り戻したの
だつ！しかし、まだまだ悪は世界中で蔓延している……今日も明日
もプリンは「スプレイヤーとしてアルバイトを頑張るのだッ！頑張
れプリン！不景気に負けるなプリン！正社員の道のりはまだまだ遠
いぞつ！…

『ふう……」それで、悪は滅びたつ……』

『（何この）おつかれ展開……』

そして、傍観者の青年である庄司は思った。
色々と突っ込みどころは満載だけれど、結局魔法は一回も使ってね
えなあ……と。

「ふう……終わった、あたしの……あたしだけのプリンちゃん……」
「ふう、寂しいのです……比奈は来週の放送がとても待ち遠しいの
ですよ……」

テレビの画面にまたかあいらしくヒントイングの曲とムービー
ーが流れ始めた。

僕と比奈ちゃんは番組が終わった余韻に浸つて、ぼーっとその場で
テレビ画面を何の気なしに見つめていました。……ううむ、今週の
プリンちゃんも素晴らしいかったです。後で、録画した今日の放送
分を脳内に映像を叩きこむ意味で夜通し、じりじりと手淫しながら
鑑賞するにしまじょうか。

「うわふつ……うう、けつたいなアニメ見たせいで何だか胃がキリ
キリと締め付けられるように痛くなってきたぞ……。さ~よ~ちい
~バファンないかあ~」

「あるけど……吸血鬼つて、バフーリン飲むんだね……」

メルちゃんはフラフラとした足取りで台所にいる小夜も元へ近寄つ

てこきます。

ふむう、メルちゃんにはまだこのアニメに対する精神的な抗体は持つていなかつたのですね。

メルちゃんには悪いことしましたね……小夜に最初見せたとき、お腹痛いよつて訴えられましたからね……。その後、陣痛かい？つて聞いたら思いつきり打たましたが、うふふ、無論気持ち良かつたです。

「……ふむふむ、なかなかに侮れませんね魔法処女。真性メイドの體とお手合させ願いたいところなのですが……とはいえ、フィクションの產物。残念です……ちくしょううのやうう、はあ～～～」

碧ちゃんは肩をがつくつと落とし、ため息をついていました。

ふむん、碧ちゃんもビーナスのアニメのファンになつたよつですね。結構、実に嬉しいことこの上ないです。新たな生贊……もとい、仲間をげっしちゅうしました。テンテカテーン

「…………風呂、上がつたぞ小夜。良い湯加減だつた」

「あつ、琴音けりやん。良かつた……つて、ぎょぎょつーー？ー、琴音ちゃん……そ、その格好は……」

そして、今までお風呂に入つていた琴音けりやんは僕のいるリビングに入つてきました。

ふ～む、琴音ちゃんは長湯が好きなようですね。といつより、入浴自体が好きなのですね。

今度、お兄ちゃんである僕と一緒にに入る機会あつたら背中流しつこでも……。

「やあ、琴音けりやん。その格好、ぶりついですねウふふ」にっこり

「風呂に上がるど、私の巫女服がけつたいたなコスチュームに置き換

「（……でも、それ着るんだ。着ちやうんだ……）」（小夜）
「（……比奈も、プリンの「スチューム着てみたいのです」）」（比奈）

「（シンドレーン）」「（醜）」
「（私もわざわざ……）」「（メル）」

お兄ちゃんとアイドル妹（前編）

「ジタバツタす～る～なよ～」
「…………」「…………」「…………」

某カラオケBOXのある一室にて、マイクを握り、得意気な顔して陽気な声で歌うメルちゃん。

そして僕と小夜、比奈ちゃん、琴音ちゃん、碧ちゃんの五人は順番を待ちつつ、メルちゃんの美声に酔いしれていました。もうお気づきかと思いますが、僕とシスターZは週末の休日を利用して、駅前のカラオケBOXにやつて来たのです。

「（……古い。曲のチョイスがすごいぶる古いよメルメル……）」
「（比奈はクソパンマンのテーマソングを歌うのです）」
「（……何だ。じぇ、じぇーぱつふ？あ、あにそん？……やっぱいぞ、全然わからん）」
「（やはり一百年生きているだけあって、メル様の曲のチョイスは懐古厨の雌豚ですね）」

ふむ、シスターZは今か今かと自分の美声を晒したくてウズウズしていうようですね。

うふふ、お兄ちゃんも楽しみですよ……さて、録音録音。シスターZの美声を録音して今夜はうはうはハッスルするとしましょうか。

「ハア……ハア……ヌハハツ、やはりからおけというやつは楽しいな！久しぶりに熱唱してしまったぞ。はあ、喉が渴いた……」
「やあ、メルちゃん。お兄ちゃんは思わず、右手でバアナナをピストン運動したくなるほど聞き惚れちゃいましたよ。あつ、僕の飲みかけでいいならこのジュースいるかい？……関節キスです、ぽ

つ／＼＼＼

「いるかつ、氏ね！」

一曲を歌い終えたメルちゃんが気持ちよさそうなアヘ顔で喉の渴きを訴えたので僕の飲みかけのジュースを手渡そうとしましたが、思いつきり拒絕されました。……お兄ちゃん、ぐつすん。

この切ない思いを乗せて、今度はお兄ちゃんの十八番のアニソンを披露するとしましょう。岱して、少子高齢化のこの社会に訴えかけるセンセーショナルな前衛的ソング。お兄ちゃんの美声に聞き惚れて、濡らすんじゃないゾッ。

僕が液晶の端末に入力したアニソンのインストロがこの狭きカラオケルームに軽快に流れます。

そして、僕はマイクを構えて堂々とした面持で歌う準備をします。うふふ、見て下さい、妹たちが醸し出す何処かしら～っとした空気、僕は超えるべきハードルが高ければ高いほど、萌えちゃう……燃えちやうタイプなのです。

「＼・づ・く・り、しまつしそつ！——ツー

お、おるるー？な、何故つ……曲の出だしなのに止まるのですか！？もしかして、カラオケの機械の故障なのですか！タイミング悪いですねっ！！

……。
いや、これはあれですか。

もしかして、アカペラで歌え……ヒ？

いやんっ、ばかんっ、そんなの……あたい恥ずかしい！そんなつ……そんな、いいでしょ。

皆々様が僕に羞恥プレイをお望みならば、その挑戦真っ向から受け
て立ちましょ＼＼＼＼＼。

そして、僕は再び氣を取り直して握り潰すかのような勢いでマイク
を握ります。

「お兄ちゃん、今度は私の番だからマイクちょうどだい」

小夜が僕が持っていたマイクをするつと、いつも簡単に奪いました。

「おお～、今度はさよちーが歌うのか！よしよし、私がみつちり採
点してやうう！ぬふふ……」（得意気なメルちゃん）

「小夜ちゃんは何を歌うのですか？」（興味津々な比奈ちゃん）

「えつと、その……恥ずかしいけどね。メジャーな感じでE-L-T
のもつちーの歌……」（初期の小悪魔的な性格はどこへいったのや
ら、な恥ずかしげに俯く小夜さん）

「もつちー？そ、それは美味しいのか小夜……」（そもそも歌自
体がよくわからない一人浮きまくっている大和撫子な琴音ちゃん）

「うた、アカペラ……僕の、アカペラ……。

うふふ……皆さん、聞いてください……僕の……アカ、ペラ……

……。

トン……。

後ろから誰かに肩を叩かれ、振り向くとそこには田を瞑り、左右に
首を振るメイドの鶴ちゃんがいた。

「＼＼主人様、お氣を落とさず。……まあ、こんなこともあるわ」

お兄ちゃん、ちょっと本格的に木陰で泣いてもよろしいでしょうか？
…………。

そして、数時間経過。

シスターZと休日を楽しんで（正確には僕は眺めていただけなので
すが、うふふふふ……）、そろそろお開きムードが漂い始めた頃に
突如として、思いがけないほどの女の子が現れた。

「じゃーまねつーまつたせつたねー……って、お、おひひ？」

今までジユースを持つてくるカラオケの店員さんしか開けなかつた
ドア。

そのドアが突如として、見ず知らずの女の子の元気な掛け声とともに
に開かれた。

白のキャスケットを深めに被り、白のセーターと緑と黒のチェック
模様の短めのスカートと現役女子高校生を思わせるその格好。

そして、そんな清純そうな女の子には不釣り合いな不自然なサンング
ラス。

「…………あ、あっれ～？も、もしかして、ボク……部屋、間違えちゃ
ったカナ……？なーんて、あはっ、あはははは…………」

…………。
決定的なのは田の前の女の子が放つこの透き通るような女性らしか
らぬボーカルの美声。

そして、僕はこの声を少なくともここにいる誰よりも知っているし、

新世界を構築しようとしたキラ的な人と同じくらいついているかも
しないね。うふっ、うふふふ。

「…………あはっ、あはははは…………楽しいところ、お邪魔しました～～
なーんて……」

そして、女の子はそのまま何事もなかつたかのようニアドアを閉めようとした。

「ま、待ちなさい！！」がしつ

しかし、そうは問屋が居しません。

おしおきなどではなく、確認しなくてはいけません。僕は、すかさず女の子の両肩を逃がさぬよう思いつきり掴みます。

「ハアハア……君はハアハア……もしかして、いやもしかしなく

「な、何……？何なのこの人……こ、怖い」

女の子は小動物のようにふるふる震えながら、僕を見つめているようです。

「う、う、うの、僕が、ま、ままあまあか……」
「んな所で
君とハアハア！」

「ほ、僕は……ほかあ……ほかあ……」

「えつ、えつ、あつ……な、何……何なの?」

! ! ! !

卷之三

「お兄ちゃん、何せ？」

お尻に痛烈な一撃が直撃し、全身に心地よい電撃がぴりぴりつと走る。

ううふうふう、ええへへと、とんでもなくわざもぢいで
すう。

「床でビックリビックりしてん……」の男は一体何をやつておるのだ…

「……小夜、そいつの両手両足首に重りをつけて東京湾に沈めな
いか？」

メルちゃんは小夜のタイキックで床に墮ちた僕を大変嫌悪感に満ちた表情で見つめています。

琴音ちゃんにいたっては、何やらブロック塀を用意して僕を「き者」としようとしています。

えへへ……そんな、強烈う一な眼つきで「うん」でください、う

15

「はあ……。つちの兄がいきなり粗相をおかけしまして本当にごめん

なさい。うちのハナ子は見知らぬ女の子を見たら発狂するみたいだ。哀想な性格しているんです。許してやつてください」

「せ、せせり…………せせ」

妹様は目の前の女の子に謝罪と容赦ない僕への悪口をおっしゃっています。

床にへたへたとへたり込んでいる女の子は僅かに苦笑い。ふふつ、いけない。あまりの衝撃にちょっとほつちやける僕のお茶目さんな性格はどうやらまだ治つていないうなります。いけないいけない……パパに女の子には優しくしなさいと言われているのに、気をつけないといけませんね、てへつ

「……プリン、プリンの声です」

「あ……」

ほう、比奈ちゃんも僕と同じくどうやら氣付いたようですね。

「ブ、プリン……？ 何それ美味しいの？」

「誤魔化しても無駄なのです、中の人」

「わ、ワタシハ、ウチュウジンテアル。プリンナドトイウネームテ
ハナイデス」

「この女も何なのだ……」

比奈ちゃんに問い合わせられ、女の子はたじたじもじもじ。
ふふつ、今更そんな声を変えて、プロの僕には通用しないのですよ。

そして、よつやく回復した僕は立ち上がり、その女の子に向かつて言います。

「誤魔化しても無駄ですよ……君は『魔法処女まじかる プリン』の主人公っ、プリン・カスターを演じる歌って踊れるアイドル！ 桃井林檎ちゃんですね！？」

「アイドルじゃないよつ、ボクはアイドル……あつ」

気付いた時には既に遅し。

僕が力マかけた女の子はいつも簡単に自分の身元を証明してくれた
ようです。

「はあ～～……まいったなあ、こんな所で一般びーぽーに見つかっ
ちやうなんて」

勘弁したのか、田の前の女の子……いや、林檎ちゃんは白のキャス
ケットとサングラスをとり、僕とシスターーズにその顔を露わにしま
す。

金髪の肩口までかかるくらじのショートヘア。

そして、白き肌に顔の一つ一つのパーツがとても幼さが残つて
いる美少女。

間違いない、この子はあの桃井林檎……僕が愛してやまないアイド
ールですね。

「だから、ボクはアイドルじゃなくて、アイドルだっちゃーの
！――！」

ふふつ、僕の心理を読むスキルまで身につけてるとは。
さすが、ザワシの嫁。

「わあ、すごいのです、すごいのです。お兄ちゃん、見て下さい。
この子、おっぱいがちっちゃいのです

「なつ、なな……」

比奈ちゃんは林檎ちゃんの顔を下から覗き込むような形で見つめています。

ふむ、何ていうことを言つんだい比奈ちゃん、グッジョブです。

「へ、変質者ッ」

林檎ちゃんは両手で胸元を隠し、真っ赤な顔して僕にそう言つます。何故か僕が罵られるといつ一連のパターン。最高です。

「なんだ……この女はあの気持ちの悪いアニメの主人公の声をやつてるやつか」「…………なんですって。ちょっと、そこのはんぬーの君、もう一度言つてみてよ」

メルちゃんの小さな弦きが聞こえたのか、林檎ちゃんはメルちゃんをギロツと恐ろしい形相で睨んでいます。

「ひ、ひんぬーだとう……！い、いいだりつつ……もづー一度言つてやる！…地雷アニメのクソ声優！」

「き、きいー！だ、誰が地雷アニメのクソ声優ですってえー！…あのねつ、ボク達声優は命かけてんのつ！あんたみたいな生意気なクソガキにそんなこと言われる筋合いはないの！べえーだつ！」

「ぐ、クソガキだとう！…このビツチー私は齡一百年この世を生きる吸血鬼だぞおー敬え、バカあー！」

「はあ！？齡一百年！？吸血鬼！？何そのアニメみたいな超設定！？」

「あんた、にわか腐女子でしょー？バーローー！」

そして、火が付いたのかメルちゃんと林檎ちゃんは互いに罵り合つ

ています。

「、これは……もしゃ修羅BARといつやつなのでしょうか……。
そんな、僕を奪い合う争いだなんて……やめて下さい、一人とも。
僕は二人とも同じよ」、平等に愛しますから……もちろん、さん
ぴーもりますから。

「「それはない」

それはない、入りましたー。

「「ふぬぬぬぬっ……」

「ふ、二人とも……落ち着いて。そうだ、折角なんだし、林檎さん
も私達と一緒に親睦を深める意味でカラオケしない？」

睨み合うメルちゃんと林檎ちゃんの仲介に入ったのは我が妹、小夜。
ふむ……いいかもしないね。林檎ちゃんは声優だけでなく、歌手
としても業界ではS評価ですし……もつとお近づきになれるチャン
スだしね。

「カラオケ……か。いいだろ？、このビッチに私の歌唱力を見せつけ、泣かしてやるのも一興だなくつくつく……」

「言つねえキミ……。ボクは声優だけでなく業界では歌姫とまで呼ばれるほどの女の子だよ。数分後に泣いているのは果たしてじつち
なのかなくつくつく……」

「いや、だから……親睦を深める意味で」

こうして、吸血鬼メルちゃん対アイドル林檎ちゃんのビジュラ大会
が始まった。

お兄ちゃん」とアイドル妹（後編）

「くくくくく…… 吸血鬼の私の悪魔的な美声に聞き惚れて、下のお口をびぢゅびぢゅに濡らすじゃないぞこのビッチ」

「ほんと、口の悪いお下品なガキだよね君……いいよ、アイドルの力つてものをとくとその身体に一生分の精神的傷痕を刻み込んであげるよ……くっくっく」

カラオケBOXといふ名の閉鎖空間において。

メルちゃんと林檎ちゃんはマイクを握り、今にも呪殺しそうな感じで睨み合っています。

そして、傍には小夜がオロオロと両者を交互に見やり、仲介に入ろうと試みていますが、一人の殺氣といつ殺気に充てられたのか何とか一歩踏み出せずにいます。

ふむ……ここはお兄ちゃんである僕が器量といつものを妹達に見せつけなくてはいけませんね。

さすれば、好き好き大好きお兄ちゃんぶつちゅうー的なイベントCGがげつちゅうできちゅつビッグチャンス到来ですからね。

『すじ』いつ、お兄ちゃん大好き!! キスして!! 抱いて!! そして近親的な相姦して!!』

『すごいのです。ソンケーしちゅうのです。某チューべットのようになじゅーちゅーしてほしいのです。そして、お兄ちゃんの肉棒にもちゅちゅするのです、レロレロ……』

『くつ……そ、その何だ……お前の肉棒が欲しい……も、もちろん私は巫女服を着たままのプレイだ……／＼／＼』

『真性メイドの私の身体はご主人様、全て貴方のものです……嗅ぐ

なり触るなり舐めるなり煮くなり焼くなり食べるないして下さいませ……キヤツ、いつちゃつた！碧、イッチャツタ／＼

『ふ、ふんつ……！好きにするのだ！どうせ私なぞ、とうに枯れ果てた一百歳のババアだ……貴様のような下衆に何をされようとあつ、やめりつ！そんなところ舐めるなあ……／＼』

ふおおお……お兄ちゃんの脳内麻薬はーれむらいのうは既に循環系を経由して身体中に行き渡っているようです。

そうです……自ら動かなければ、何も得られない。そうなのですよつ、それは恋愛でも言えることで、アグレッシヴにアタックナンバーワンしなければ一生、独身貴族……自宅警備員……諸行無常の響きアリ……古き良きエロゲー主人公もといナンパマンを見習つて僕も自らを律せねばなりません……。

「炉理根万歳、所他根万歳、男根一発、性者生糸ノ断リヲアラワラス……」ブツブツ……

「な、何かこの人小声で唱えているんですケド……」

「おいつ、そここのビツチ大蔵！そんな変態は放つておいて、早く私とからおけ勝負をするのだつ、くつくづく……それとも何だ？早くも私と勝負するのが怖くなつて下のお口がゴルゴルになつたかこのビツチビツチ！」

「さつきからビツチビツチって不名誉なワードを連呼しないでよもおー！ボクにはちゃんと、林檎つて名前があるんだからつこのひんぬーのバーゲンセール！」

「ひつ、ひんぬーの……バーゲンセールだとおー！このビツチビチイ！表へ出るわーわ、私が気にしていることをよくもおおおー！」
「なによー、やる気ー？」
「ぐぬぬぬぬぬ……」

おつとつと、僕が行を唱えている間にますますメルちゃんと林檎ち

やんの勝負はヒートアップしているではありませんか。子供の様に頬つぺたや髪を引っ張つぱり合つたり、揉みくぢやになつていやらばかんなレズレズ展開に……残念ながら僕の脳内願望ですが。

ふむ、しかし林檎ちゃんはこのよつなかよつと子供っぽいところもあつたのですね。

ライブのステージから眺める華奢な彼女は華やかで、美しく、そしてその中に可愛さを含んだそれもう僕のような変態紳士にはもつたいないくらい遠い存在だったのに。彼女はまだ高校一年生の女の子……本当は色々なしがらみから逃れて、友達と思いつきり遊びたい年頃でしょうに。他人の僕には計り知れないと、彼女の新たな一面を見ているよつな気がします。

フフフ、柄にもなく語つてしましました。

いけないいけない……今は妹達の喧嘩をお兄ちゃんである僕が止めなくては。

纖細な生き物の女の子の顔に傷をつけたらメーッツなのです。度が過ぎたらメーッツなのです。

そして、僕は今まさに可愛らしく取つ組み合つてているメルちゃんと林檎ちゃんの肩に手を乗せ、言ひます。

「ランボーはいけません……わあ、お兄ちゃんの美声を聞いて落ち着いてください。皆様と一緒に、いちにつせんはいつ・くれえ・なずむう・まちのお・ひかあ・りのかげのお・なか」

「「うるさいだまれっ！…」」

「あ、はい、ごめんなさい」

お兄ちゃん、怒られちゃいました。ショボーン。

「はあはあふうふう……！」、こんな争いは不毛だな。それから
おけ勝負といひつか」

「ぜえぜえひいひい……そ、そつだね、や、やつぱりアイドルは喉
が白慢だからね……」

数十分後。

長らく続いた女子達の取っ組み合には両者がこのままでは決着を着
かないところ」とようやく終止符を打たれました。

「くく、このからおけ口ボの採点評価は半端なくクソみたいに…
…それはもうぶつ壊して燃やしてチリチリにしたくなるくらい厳し
くて有名だからな……覚悟しろよ」

「そ、そんなに厳しきの……？」くつ

メルちゃんはカラオケの機器を「コンコン」と叩き、ふんぞり返つて説
明しています。メルちゃんの説明を聞いていた林檎ちゃんは見るみ
る内に真っ青な顔になっています。ふふ、確かにカラオケ機器の採
点機能はとてもなく厳しく、少しの音程外れも見逃さない万能口
ボ君ですからね。たとえ、上手く完璧に歌えたとしても望む結果が
得られないという経験をのぞ白慢の皆様もしたことがあるでしょう。
特にこのカラオケBOXはソレが顕著なのです。

「やつだな……。実際、やつてみないと分からぬか。おいつ、貴
様！」

「はい、何でじょつメルちゃん？」

メルちゃんは僕に向かって、指を差したので僕はヘイタイさんの一

とく直立します。

「何でもいい、何か一曲歌つてみる」

「何でも……ですか？それでは、お兄ちゃん一曲イカせていただき
ます。タイトルは『お兄ちゃんと妹のぶつかけいしばんなのにゃん
！あつたかいのにゃんこにゃん！』それでは、皆様もご一緒にど
うぞなのにゃん」

ヴァキ

「真面目にやれ」

「はい」

メルちゃんは真顔で僕の頭をじぱきました。

「ふむ、なるほどそういうことですか。つまりは僕に一曲イカせ
て、採点口ボの恐ろしさを林檎ちゃんに見せつけるためのメルちゃ
んの一種の精神的攻撃ですねこれは。……しかし、メルちゃん。作
戦自体は大変よろしかなのですが、ひとつ……貴方は決定的なキヤ
ストミスを犯しました。

「……では、お兄ちゃんの十八番。曲のタイトルは『お兄ちゃんの
濃厚ミルクでミックミックにあげにゅー ぐぱあ』でよろしい
でしょうかメルにゃん？」

「あ～もぉ何でもよい。いちいちタイトルを口にするな気持ち悪い

メルちゃんの唯一のミス……。

それは、僕を採点口ボの人柱にしたことです。

僕の歌唱力はあの「A COの有線で認定されるほどものものである
ことを彼女は知らない。そしてその実力を肌で感じ、僕のゴッドヴ
オイスに酔いしれなさい……。されば、色んなところがびっかり

びちゃになり、知らず知らずのつりてお兄ちゃんの肉棒を求めるよ
おになるのです……。

僕がこのマイクを握つたが最後……。

このカラオケルームという名の密閉空間は忽ち、汗や肉欲液まみれ
の酒池肉林の渦に巻き込まれることを彼女らは知らない……。

「それでは……お兄ちゃん、イカせて頂きます

ぶっかけミルクッ！ぶっかけミルクッ！（お兄ちゃんは只今、熱
唱中なのです）

「（微妙に欠点免れているのが何かムカつくよね）」

「（お兄ちゃんが切なすぎて比奈の口からは何も言えないのですよ）」

「（ふ、ふふ……やばい、な。……誰か私を止めてくれ。今の私は

何をしてかすのか分からぬ）」

小夜、比奈ちゃん、琴音ちゃんの小さな咳きが僕の耳に入ってきた
す。

ああ……あたいは、あたいはもあ……

「（主人様、お気を落とさず。……まあ、とりあえず頑張れよ）」

拝啓

お父様

お母様

妹様

一冬過ぎ、大分暖かくなり、暮らしやすい穏やかな季節を迎えた。

お元気でしょうか？私は元氣モリモリ性欲ちゃんもシコシコ全快で
ござります。

早速でございますが、搜さないでください。

by ONHITYAN

「ヌハハハハツ、どうだあ！見たかっ、採点口ボの理不尽で暴虐的な威力！歌詞はともかく、その彼奴はそこそこ歌えていたのにも

関わらず、だつ……

「つ、つ……」

メルちゃんはまたもやまな板胸を張り、林檎ちゃんに向かってそう言います。

ふむん、そこそこ歌えていたとな。もつ、それだけが今のお兄ちゃんの救いなのですよ……。

そして一方の林檎ちゃんは何故かお腹あたりを両手で押されて、今にもゲロゲロゲーしそうな苦しそうな表情をしております。……ふむ、僕の点数はともかく結構メルちゃんの作戦は精神的な面で有効打をついているということでしょうか。一応念を押しておきますが、僕の採点はともかく、ですよ？

「さあ、これで採点口ボの恐ろしさを分かつたところで勝負だつビツチビチイ！」

「ちよつ、ちよつと待つて……」

そして、早く歌いたくて仕方ないのかメルちゃんはマイクを握り、テーブルの上に乗つて既にスタンバッています。しかし、お年頃の女の子を下から眺めるのは何とも素晴らしいことでしょうか。ちい、スカートの中身の布きれが見えぬことが残念でござる。

「何だあー！ビツチビチイ！」

「あの……そのつ、おトイレ……行つてもいいかな？」

林檎ちゃんは真っ青な顔して、左手はお腹に、そして氣まずさうに右手を上げます。

ふむん、林檎ちゃんの台詞と様子を見て僕は察しました。ずっと、我慢……してたんだね。

おっと、僕のお口からは林檎ちゃんが今何を催しているのか、それ

は言えません。ないちょ！

「と、トイレだとう……貴様つ、もしさ採点口ボに怖氣付いて、敵前トーボーするつもりだな!? そうはいくかつ、私と貴様が歌い終えるまでここに残つてもらうからなつ！」

メルちゃんはそんな林檎ちゃんの様子に素直に受け止められないのか、その場で地団駄を踏んで、マイク越しにそんなことをおっしゃっています。ふむん、結果的には火に油を注いだようなものですね。これは。

「うむわつ……す、するわけないでしょ！そんなん……ボクは歌姫なんだよ！君みたいなトーシロー相手に……うつ、うう、お腹痛い

そして、林檎ちゃんもメルちゃんの言い分にカツときたのか、声を荒げそんなことを言つています。しかし力み過ぎたのか、林檎ちゃんはまた両手でお腹を押さえへろへろとその場で蹲つてしまいまし
た。

「ふんっ、そんなにシーシーやらうんをしたいのなら、歌いながらでも垂れ流せばいいではないかっ！……さあ、私と勝負しろビッヂー！」

「し、しないよー！あ、アイドルは……し、シーサー何かしないもん……う、ち何かしないもん……あつ、あたた……」

林檎ちゃんは真っ赤な顔して、メルちゃんにそう抗議します。

ふむん、口には何とかしないといけません。もういう時こそ、お兄ちゃんを十一分に使つてもらえるチャンスなのです。そして僕はおもむろに口を開け、林檎ちゃんの足元に四つん這いで向かいます。

「…………ナニ、してるの？」

「シーシーやらおうん が我慢できないと仰られるのなら……僕の上のお口が貴方のお便器になりましょっ」

「な、何言つてんの！？ち、サイテー！！氏んじゅえーー！」

ドガス

「あぴぽつー？」

そして容赦ない林檎ちゃんの垂直蹴りが僕の股間ちゃんにクリーンヒットしました。

あ、ああ…………ダメえ、あたい…………もお嫁にいけない身体になりましたのですぅ…………

「うう！い、今動いたせいでお腹が…………」

「だ、大丈夫？本当にトイレ行ってきたら？連れて行つてあげようか？」

私のリアル妹様は気遣いの言葉を林檎ちゃんにかけています。うーむ、本当に僕の妹は僕以外に気遣いをできる出来過ぎた良い子です。

「何を言つてゐるかよちー！？そいつはトイレだとか言つて、そのまま勝負から逃げるつもりなのだぞ！？」

「メルメル、この中で一番年上なのに大人気ないよー

「うつ」

「メルちゃんはお子様なのです」

「うぐつ」

「メル、我儘は子供の始まりだぞ」

「うひやつ」

「メル様は汚らしき雌豚でござります」

「ひい」

「メルちゃん、僕の肉棒をお舐めなさい」

「シネツツ」

「バキッ

「OPPQRSTO-」

……い、痛い。

流れ的に何でもできそうな雰囲気でしたが、人生そう甘くはないですか。

しかし、シスターZの言い分はもつともなのです。そして、雰囲気を察したのがメルちゃんははあと軽く息を吐き、口を開きます。

「…………すまん、熱くなり過ぎた。体調が悪いのに……ほり、手を貸してくれ。トイレだらう~一緒に連れてってやるぞ」「う、うん……」

そして、メルちゃんが手を林檎ちゃんの前にだし、それを林檎ちゃんは取ろうとします。

友情が芽生えた瞬間、とでもいいますか……しかし。

「…………いい。大丈夫だから、ほんと気にしないから」「…………え?」

林檎ちゃんはそう言つて、ドアに手をかけ個室から出よつとしています。

しかし、そつは問屋が卸しません。僕は皆のお兄ちゃんなのです。頼られたいお年頃のお兄ちゃんなのです。そして僕は林檎ちゃんの

下に腰けつけ、すぐわざと手を取ります。

「え? な、な」「……?」

「大丈夫じゃないですよ……」「ついでに時じや、お兄ちゃんに任せな
れー」

「あ、お兄ちゃん? 何言つて……わつー?」

僕は彼女の背中と裏腿に手をやつ軽々と彼女を持ち上げ、抱っこし
ます。

いわゆる世間様々でこうお姫様抱っここうやつりましょう
ね。

「ちよつ、ちよつとーこんな格好恥ずかし……」

「それでは、先生。行つてきます」

「じ、じこーへやつ、や、やめつ……。」

僕は個室のドアノブに手をやつそのまま彼女を抱えて表に出ました。

「…………誘拐?」「…………

「いいでいいでしょ?」

「はあはあ……ちよつと、一体何のつもつ……」

林檎ちゃんは僕をキツと睨み、そつ眞こます。

「女子おトイレです。わあ、存分にシャーシャー、プリプリしてき

なさい」

「いつ……だから、アイドルと天使はシーシーとか、そのうん……なんてしないの？！……ていうか、君、女子に対するデリカシーって言葉がわかんないの？！」

林檎ちゃんは真っ赤な顔して声を荒げています。

ふむん？おかしいな、明らかに林檎ちゃんの様子は大の方を催しているからだと思ったのですが……僕の見当違いなのですか？

「…………」

そして林檎ちゃんは僕のことをまるで氣にせぬように、ポツケから何やらポリエチレンの袋に入った青と白のカプセル型のお薬を取り出し、口に一粒放り込み、そのまま飲み込みました。

「……何、見てるの？」

「いや…………」

「ボクが持ってるこのお薬が何なのか、気になら？」

「…………うん」

ふむん、何だかヘヴィな雰囲気になりましたが、お兄ちゃんである僕はそのお薬が何なのか気になるのです。素直な反応しかできないお兄ちゃんを許してあげてね！

「教えてあげないよ、お兄ちゃん」

「う」

……今、林檎ちゃんはプリンの声で僕を……。

「あはは、ばーか」

そして、彼女は笑顔でそう言い、僕に背を向け去つて行きました。
僕は……本当の彼女の顔をまだ掘めていないのかもしません。

「君、ちょっと置までじ同行願おうか」
「……え？」

お兄ちゃんとアイドル妹（後編）（後書き）

林檎 りんご
(16)

第六の妹。プリンの中の人。ボクツ娘。

属性：アイドル声優

【幕間】『妹増殖計画会議?』

社会から隔絶された地下空間。

そこは何者の罵声も悲鳴も嬌声も何もかもシャットダウンする。つまりは一步踏み込んだこの地下空間には忍者の国NIPPONの治外法権が存在しないことを意味する。

自由。

それは仕事や勉強に追われた民衆の誰しもが欲する甘美な欲求、しかし逆に言えば保障されない意。つまりは誰からも庇護を受けないのだ。

捨てられた空間、社会から捨て去られた人々。

民衆は彼らのことと皮肉を込めて『奈落の愚者』と呼ぶ。

しかし、奈落の愚者達はそのことを恥と認識していない、むしろ誇つてさえいる。それは己が落ちこぼれであるという認識をはるか遠くの彼方に捨て置いているからだ。己は高等生物、と驕つてさえいる。そして彼らはアリクイのように待っているのだ。何れは民衆がこの地下空間に魅了され、予め敷き詰められたレールに則つて型に嵌つていくということを。

「それでは第七十三回『妹増殖会議』を始めます」

暗闇の暗室にて、パワー・ポイントの光で浮かび上がった少女の地肌は酷く青白く、まるでこの世に存在しない浮世の者を思わせる佇まいです。咳いた。十一人の愚者たる彼らはその重々しい彼女の様に、顔を強張らせ次の彼女の言葉を待つた。あの中でも一番色々と残念な長老でさえ黙っているのだ。相當に深刻な事態に陥っていることは肌で感じ取れよう。

「……今日は、また新たな対象者の性質について我々の調査で明らかとなりました。……と、その前に前回の会議をニヤニヤ動画にうしましたところ、ニヤニヤ住人から様々にアクションがありますので報告します」

「……なんぢや、見せてみよ」

名波と呼ばれた少女は長老の言葉にこくんと頭を下げ、カタカタとパソコンのキーボードを機械的に操作する。

すると、スクリーンに映し出されたのはニヤニヤ動画と呼ばれるサイトである。このニヤニヤ動画とは某ニコニコ動画のサイトとは似非的な立ち位置で存在しているが、検索してもグーグル先生には引っ掛からない、いわば国家機密レベルの裏サイトである。では、国家機密であるサイトにニヤニヤ住人はどうやってアクセスしているのか、それは今のところ謎に包まれている。

そして、スクリーンには前回の会議の動画が再生される。しばらくすると画面上にはニヤニヤ住人が入力したコメントが流れてくれる。

『ちよつ wwwなwwwにwwwこwwwれwww』『wwwwww
wwwwww』『色々とヤバいだろwww主に頭の方がwww』『コラ

『おいwww』『やめろwww』『やめてwww腹痛いwww』『仕事しろwww』『お前もなwww』『長老wwwどこのドーラードだよwww』『俺と同業の方がいっぱいいるwww』『長www老www』『何これ、ネタなの?死ぬの?www』『自重しろwww』『奈落の…なんて?www』『だせえwww』『部活かよwww』『シーシー(;)ハアハア』『妹攻略www』『…』『テラ変態www』『マジ基地www』『見にくるwww』『ヤクルト盛大に吹いたじやねえかwwwどうしてくれるwww』『長老で抜いた、死のう。』『おいせうおいせうネ申ネタ、本当にありがとうございました』『自演』『これおまいらのオフ会風景だろwww』『再生数……www』『何でちょっと薄暗いwww』『地下帝国乙wwwwww』『対象者ってなんだよwwwメガネのことか?』『誰得だよwww』『俺得だよwww』『公開オナニー集団www』

「IJのよつこ多べのコメントが入力されていました
「荒れに荒れとるではないか……」
「(、 、 、 、) プッ」

長老は神妙な顔して動画を見つめているが、奈落の愚者らは想定範囲内だったのか、特に反応を見せず、中には欠伸をかみしめている者やちよつとフイしている者いる。そもそも、長老はネットサーフィンを一度もしたことのない老害で、IJのような反応が予想できなかつたのである。某二口二口動画でJのようなものをうロすると、すぐさまBAN（店仕舞）されるのは既づまでもない。

「だ、誰がいや!今、ワシのことを笑った愚か者はー?で、出でこいつー!」
「…………」「（奈落の愚者ズ）シーン

ちょっと笑われたのが気に入らなかつたのか、長老は杖を上げ、激高して問い合わせる。

しかし、奈落の愚者らは一様に皆、静かになり、何事もなかつたかのように沈黙を保つてゐる。

「おのれ小童どもが、玄人であるワシを侮辱しあつて……まあよい。名波君、続けとくれ」

「はい、老害。それでは、今回も対象者についての動画を『ご用意したので』ご覧下さい」

何の玄人だよ、と思つていても問う者は誰一人いなかつた。

そして、今回も対象者の日常風景が収められた動画が再生される…。

…。

『はあーー目が、目が……痛いぞお……もつと優しくしろお……』

『メル様はアホの子ですね。目を瞑つていなければ、シャンプーが目に入つてシミシミするではありませんか』『ゴシゴシ

『だ、誰がアホの子だあ！？ぐあ！メガツ、めがあー！…』

最初にスクリーンに映し出されたのは、一般的な家庭にどこにでもあるような狭きタイル張りの浴場。

その浴場では一人のボンキュッボンッのカチューシャを着けた女性が色々と残念……もとい華奢な白き体躯の長髪の幼女の頭を『ゴシゴシとシャンプー』している。モチのロン、『ご都合主義的に局部は湯気で見えぬよう設定されていることは言つまでもない。

「 「 「 「つま らおおおおおお……」 「

これには長老や奈落の愚者らもボッキッキーである。獣たちの興奮冷めぬ中、動画はなおも続く。

『背中を、アーチゴシゴシゴシゴシ』

『お、おこつ……一も、もう少し優しくだなあ……』

『す~いっすい、す~こすこ~と』

『ひやつ、ひやつ……」、「ひやつ……」背筋を指先

で撫でるなあ……』ビクツ

『これがええのんか、これがええのんか』

『や、やめつ……」、「ひやつ……」、「ひやつ……」やだいやめ

ろおー…』

怪しげに笑む力チユーシャ女性もといメイドは容赦なく指先を幼女もとい吸血鬼の背筋に芋虫のよつに這わせる。吸血鬼はその背筋に走るこせばゆさに耐えきれないのか、ジタバタと暴れまわりついには床にペッタンと転び落ち、背中の上からメイドにのしかかられる形となる。

「「ひやばゆ~キタ~!~キタよ~!~」これキタ~!~」（奈落の愚者E）

「「つ~、せ~、気持ちいいゾウ~!~気持ちいいゾウ~!~」（奈落の愚者F）

「優しくしてねつ、お兄ちゃんをとつとも優しくしてねつ」（奈落の愚者G）

「メルたん、れろれり」（長老）

思わず百合的な展開に奈落の愚者らも絶賛、妄想の晩餐会である。

『……メル様のお肌は白くてすべすべで綺麗でモリモリ心地があります

ね……一の腕ふにふ』『

『あ……お、おいつ、ビーハを触つて……』

『ふむ、果たしてメル様はどのよだな嬌声を上げてくれるのだうか。真性メイドの私は気になるのです』

『……お、おい?き、貴様……何で、その、手がそのまま下へや、やめつ!』

メイドの指先は一の腕に終わらず、そのままゆづくつ、ゆづくつと女子のイケナイプレイスへ……。

『失礼します!』ガラツ

『『一?』』

そして、浴場でメイドの欲情展開になる直前で浴場の扉が一人の男によつて開かれた。

メガネをかけた優男、今回の対象者であるお兄ちゃんである。お兄ちゃんは腰にハンドタオルを巻き、右手にはアヒルのフロケット、左手に洗面器といつ出で立ちで突つ立つていた。

『や、きさき貴様ツ!な、ななななにをををを!』

『……まあ。ご主人様の巨峰はタオルの上からでもはつきつくりと形がわかりますね、ぱつ』

吸血鬼はお兄ちゃんの姿を確認すると咄嗟に自分の胸元と下腹部を手で隠し、狼狽えている。

一方、真性メイドは特に狼狽えもせず、ただただお兄ちゃんのブツに視線を向けている。

『一、これは……な、何というしづかちゃん的なアクシデントでしょ?……お兄ちゃん、びっくりです……』

『いぢいち反応が白々しいんじゃボケエーーーー！出でいけ貴様あーーー』

『イタツアイタツ！ま、待つて下さいメルちゃん……これは、その大人の都合というモノでして、ええ何とか条例という名の壁を乗り越えるために、並々ならぬエロゲー社員らの涙ぐましい努力の結果として……』

『わけのわからん』ことを言ってんじゃないわつ禿げえ！！氏ねつ、
ちねえ！！』

吸血鬼は憤怒して、お兄ちゃんに洗面器やら石鹼を投げる。
お兄ちゃんはお兄ちゃんで、自分の身を守るために四つん這いで攻撃を防いでいる。

（「）は流れ的に真性メイドの私も……） キャー、オーライチヤン
ノハッチーベンタイードスケベー』

『アツ、イヤツ、ソンナツ、フタリ』セメラレタラオ』イチャンイツ
チャ』プツツ

「……以上が今回の対象者、お兄ちゃんの人となりを示した動画でした」

「もひょひつとひだつたのに一もひょひつとひだつて、イチチャウとこひだつたのこへやせり——」（奈落の愚者B）

「ハラハラしてゐる。ハラハラしてゐる。」（奈落の愚者）

「メルたん、ちゅぱちゅぱ」(長老)

突然の来訪者のお兄ちゃんに奈落の愚者ひはー様にして殺意と、こみ上げてくる色々なもどかしさに絶望を味わっていた。分かりやすく言ひつと、くしゃみが出そうで出ない、アレと同じようなものである。

「ちゅるんちゅるん……で？名波君、今回の対象者について何か分かつたことはあるのか？」

「はい、我々は前回からメイド、吸血鬼、アイドルといったシスターを対象者に仕向けましたが……分かつたことはひとつ。今回の対象者は『とつても変態さん』な人ですね」

「…………」「」

……いや、それは分かつてゐよ、と思つていても口に出す者は一人としていなかつた。

実際のところ、それ以外は特に何も進展しなかつたのが事実である。

「彼の変態歴を箇条書きしておきます。軽くネタバレですので、読み飛ばしもオッケーです」

リアル妹の尻をぺんぺんもとい愛撫

リアル妹に孫の手で調教（未遂に終わる）

口リ妹に頭を愛撫（その前に色んなところを愛撫しようとしていた）

タオル一枚姿のリアル妹に孫の手でナニかをしようとしていた（未遂に終わる）

お風呂上がりの口リ妹に必要以上にミルクを薦める

巫女妹が入浴中に、魔法をかけてを歌いながら浴場に入場

リアル妹にパンパン丸発動（未遂に）

巫女妹の攻撃に対しても属性発動

巫女妹がトイレ中に、普通にトイレのドアを開ける

A K I B Aでリアル妹の前で公開羞恥プレイ（魔法処女まじかるプリンの変身シーン）

メイド喫茶でメイドの生足を覗姦
メイドのほいつきタオルだと思い込んでふもふ

リアル妹に初体験発言

リアル妹を引き連れて、エロ同人誌コーナーへ

リアル妹にエロ同人誌の内容を普通に語る

リアル妹におっぱい発言

メイド妹にマゾ犬発動

メイド妹の膝裏にちゅっちゅっ

メイド妹に好きな体位を尋ねる

メイド妹にお兄ちゃんと呼ぶよつ強要

シスターーズの下着を覗姦

メイド妹の涙をペろり

ロリ妹の口元のご飯粒をペろり

ロリ妹に恥辱的な制服紹介

リアル妹の金的攻撃にアヘ顔

N T Rなエロゲー堪能

吸血鬼妹にブツを披露

吸血鬼妹にダチワフ発言

吸血鬼妹にスク水（リアル妹着用済み）提供

吸血鬼妹の吸血攻撃に目覚める

吸血鬼妹に妹になるよう強要

リアル妹と吸血鬼妹に脱衣を指示（未遂に）

リアル妹に陣痛発言（過去）

巫女妹が入浴中に、服をすり替え（プリンのコスプレ）

吸血鬼妹の歌声をズリネタにする

吸血鬼妹に自分の飲みかけを手渡す（未遂に）

アイドル妹の声をズリネタにする（過去）

アイドル妹に奇声発動

アイドル妹にアイドル発言

吸血鬼妹とアイドル妹とのさんぴー（勘違い）

システムを脳内でエロエロにする

変態の行を唱える

システムの前でセクハラ曲を熱唱

アイドル妹に人間便器（自ら）を提供

吸血鬼妹に肉棒を舐めるよう強要（未遂に）

アイドル妹をお姫様抱つこ

アイドル妹を誘拐（未遂に、勘違い）

入浴中のメイド妹と吸血鬼妹に飛び込み営業

「まあ細かいところを挙げればまだまだあります、やつとこんなものですね」

「な、何ちゅう男だ……」（奈落の愚者H）

「す、すごいことをやってくるな今回の対象者は……アグレッシヴすぎたんだろ」（奈落の愚者H）

対象者の変態経歴の凄まじさに億した奈落の愚者らはざわつき始める。

そもそもどうだろ？ リア充もいふとはいえ、エロ口に対してもそこまで耐性のない彼らなのだから。

しかし、エロ口は大好きという何とも矛盾しているともいえるかもしれない。

「ええいっ、鎮まれ、鎮まれー！とにかく、まだ今のところ情報は少ないのう。とりあえず、名波君。引き続き対象者に妹を仕向けてくれんかの」

「はい、分かりました老害」

「では今日のところはこれで解散つ」

奈落の愚者じは長老の金剛とともに席を立ち、駄弁りながら暗室を退室していった。

そして、暗室には名波と長老の二人だけとなつた。

「ところで名波君」

「はい？」

「ワシの肉棒を鎮めてくれんかの」 ハアハア

「黙れ、老害」

お兄ちゃんと探偵妹

「お兄ちゃん…？また私の下着盗つたでしょ…？」

休日の麗かな午後を自室で温めの紅茶を右手に、Hロス本を左手に、マロンを頭に携えて楽しんではいると突然、扉が開きました。その開けた扉の傍に立っているのは、邪鬼のような顔した僕のリアル妹、小夜です。小夜は今にも僕を襲ってきそうな佇まいです……残念ながら性的な意味で、といつてではないですが。

「ビクッ……し、下着？な、な、な、何のことだしょ？」「ズズ…

「ぬちやくりやどもつてるんだけど……ていうか、お兄ちゃんしかいないし…うちの洗濯物の下着、みーんな無くなっていたんだよ！」

？

「…」、口ウホットさんを持つて行しあつたんじゃないかな…

？

「嘘を吐くにも苦しそぎだよつーわあ、お兄ちゃん…？今でも後でも許さないけれど、白状しあやこなさい…！」

小夜は一気に僕との距離を詰めて、胸倉をつかみ問い合わせしてきた。

う、うぐぐ……ぐぐるるるい。た、確かに……僕は妹の下着愛好者で、触つたり、嗅いだり、舐めたり、時には食べちゃったりはしますが、盗るなどという下劣でおぞましい真似は絶対にしません。そんなことをすれば、妹が次に履く下着がなくなっちゃうではありませんか。僕は妹の困り顔を見て、楽しむなどという凌辱野郎ではありませんし、何よりもソリ裏で下着を楽しむ僕の美学に反します。つまりは全くもつての濡れ衣、ということになるのです。

「比奈の……お気に入りのクマの子クーカちゃんぱんつも無くなつたのです……」

「き、貴様あ……わ、私の勝負ばんていを……！」、「ロロス。やはり貴様は私と相容れぬ存在……細切れにして、piranhaのえさにしてくれるわっ！」、「ジャキッ」

「ご主人様……何も私たちに黙つて、持つていかなくても……。そんなことしなくても、ご主人様なら脱ぎたてほやほやのばんてーをあげますのに……あつ、キヤツ、イツチャツタ！碧、イツチャツタ！／＼／＼」

「！」、「こらあ！？何で吸血鬼の私だけ下着じやなくて、スク水なんてまにあつくなものを奪うんだあ！？な、何か色々と複雑だけど……とにかく、お気に入りだつたんだからなあ！？」

「な、何でアイドルのボクまで呼ばれたの……？か、関係ないし……」

何時の間にやら、お兄ちゃんである僕の部屋にシスターズが全員集会していました。

ふむ……被害は小夜だけでなく、僕の家に住んでいないアイドル林檎ちゃんを除いたシスターズにもあるのですね。

「つらやま、許せません……僕のシスターズのおぱんぢゅやぶらじやーを盗むなんて、許せません」

「盗人猛々しいってこのことを言つんだよね」

「……え、シスターズ？ 何それ。ボク、このメガネの人の妹じやないし……えつ、えつ、えつ……？ボクがおかしいの……？これが、世界の常識なの……？」

小夜は僕をジト目で見つめ、林檎ちゃんは僕の家が初めてだからに戸惑っています。

うつ……小夜のあの顔は僕のことをまるで信じておりません。まずいです、このままではお兄ちゃんはシスターZにボコボコちゃんにされちゃいます。それ自体は気持ちいいのでむしろ良いのですが、シスターZのお兄ちゃんに対する信用問題に発展しちゃいます。うむ、こういう時こそ冷静にお兄ちゃん的な判断を……どうすれば、信じてもらえるのでしょうか？

無論、一番良いのは下着を粗相した犯人さんを見つけてシスターZの前に突き出せば、万事解決でお兄ちゃんの株も跳ね上がるのですが……。くう、しかしマンションの一室でしかもこの部屋は最上階に位置します。どうやって、犯人はベランダに侵入したのでしょうか。それこそ、怪盗的な人でなければ……。

「……いいでしょ。皆様はどうやらお兄ちゃんを疑つてらつしやるようですね。ではお兄ちゃんが必ずや下着をドロボーした犯人を見つけて無実を晴らして見せましょう……」

「……え。いや、別にそんなことしなくていいし。犯人はお兄ちゃん。だから早く出しなよ。今なら全殺しで許してあげるから」

自分ではちょっとカッコいい台詞を言つたつもりなのですが、小夜は『はあ？お前何言つてんの？アフォなの？氏ぬの？』みたいな顔して、ドギツイ視線をお兄ちゃんに浴びせてきます。おふう……たまりません、が、どうしましょ……お兄ちゃん、とつても大ピンチなのです。

「その人はほんにんじゃあありません。下着ドロの犯人は別にいま

すです「

突然、かあいらしい子猫ちゃんのよおな声が室内に響いたので、声の発信源へ向くと、僕の部屋のベランダの柵格子に右足だけ引っかけベランダの内側によじ登るうとしている一人の美少女がいました。

「ぎょっ……え、何してるの?」この娘……ていうか、何なのこの状況……

「……下着ドロの犯人はそこの人以外の別の人です。ですが……その前にヘルプミーです」

小夜は可哀想な生き物を見るかのような瞳で目の前のベランダ美少女を見ています。

赤と黄のチョック柄のリボン二つで結んだ金髪のツインテール、茶色のトレンチコートにリボンと同じ柄のスカート、茶色の探偵ハットと時代錯誤……というより、少し渋めのチョイスが際立っているちょっと第一印象は変な子、と言つたらよいのでしょうか。しかし、お兄ちゃんは普通な子も、ひんぬーな子も、きよぬーな子も、変な子もイケますので全然大丈夫です。

「ふ……危うく、敵組織の罠に嵌まり、危うく転落死するところだつたです」

シスターーズの力により助けられたベランダ少女は一息ついて、僕のベッドに座ります。

ふむ……いくら僕がイケても、彼女の正体が何なのか知る必要が

あります。しかし、敵組織とは何者なのでしょう……。ショッカー的な人達でしょうか……あるいは、ニー・ティスト（ニートの最上級）……オナースト（オニーをする人）、アナリスト（アルが大好きなおホモ達）、ううむ僕の頭ではここまでしか思いつかないですね。とにかくすごい人達なのでしょう。

「ね……君、誰？私、桃井林檎つていう声優なんだけど。そんな古臭い格好した子、うちの事務所にはいないけれど……」

「……私の恰好が古臭いだなんて、失礼なビッチですね。つーん

林檎ちゃんは彼女の渋めのファッショング気になつたのか、僕が彼女に言葉責めもとい質問責めをしようとする前に、彼女に近寄り、ジロジロ身体全体を舐めまわすように見つめ、尋ねています。

「び、ビッチ、ボクが！？えつ、どこがなんで！？ていうか、ビッチって言われたの生まれてこの方、君で一人目だよ！？」

「くんくん……探偵は匂いで分かるです。貴方は処女じやありませんです……相當使い込んでいますね？年齢を偽つているようですね……さては三十路超えですね？」

匂い……ですか。

確かに俗に言われる探偵さんは洞察力や観察力が長けていることは勿論のこと、五感にも敏感とも言われますし。

「…………くっ、い、このつ」ふるふる

「けつけつけ、バー・カバー・カー！ビッチのくせに偉そうにするんじやあないのだビッチビチイ！！」

「う、うるさいっ！あんたなんか二百超えのババアじゃない！！ばかあ！！！」

「ひつ、ひわつ、や、やめふおーーー！おっぺをつかむなあーーー！」

またもや、メルちゃんと林檎ちゃんは喧嘩をし始めました。ふむ、しかし喧嘩するほど仲が良いとも言いますし、二人は互いに我が強いですが、それ故に心の奥底では繋がつて……おつと、お兄ちゃん一瞬、イヤラシイ想像をしちゃいました。キャーいやらしいつ。

「…………うむ、とにかく君の名前をまだ聞いていなかつたな。教えてくれないかな」

喧嘩で收拾がつかなくなつた林檎ちゃんの代わりに、琴音ちゃんが聞きました。

「…………あ、そうですね。ふりーの探偵、天莉あまつといいますです。あ、みなさんの紹介はいいです。知つてますので」

「え…………な、なんでだ？」

「全では匂いで分かりますです」

キラーンと輝いていそうな瞳で天莉ちゃんはそんなことを言います。ううむ、彼女はよっぽど匂いを嗅ぐのが大好きなのですね。そんなに大好きなのだつたら警察犬になればいいのに……あるいはお兄ちゃんのペットの雌犬として……おつと、お兄ちゃん一瞬、イケナイ想像をしちゃいました。キャーえつち

「ちなみに、真性メイドである體の匂いはいかがなものなのでしょうか」

「一言で言ひますとです……『淫乱』ですね」

「まあ……イヤラシイ／＼／＼」

「ふーん……で、天莉ちゃんはその匂いでお兄ちゃんが下着ドロじやないって判断したの？」

「ちゃ、ちゃん付けはや、やめてほし」です……子供みたいですから」

しばらく静観していた小夜が口を開きました。

うむ？ 実際のところ、天莉ちゃんはいくつなのでしょうか。見たところ、小学校高学年くらいにしか見えませんが、世の中には不思議なことに口よりもどきといつ種族もいますからね。見た目で判断してはいけません。

「そ、そうですね……このメガネの人からは童貞臭しかしません。何というかイカ臭い匂いですね……」

「アイアムチャンピオン」ドヤッ

「……最低なんだけど。ていうか、そのドヤ顔やめる。何かムカつくから」

しかし、僕の無罪を主張してくれるのは大変ありがたいことです。天莉ちゃんにはあとで僕のサイン入りのトランクスをお送りしますよ。

「何より……現場には奴の匂いが色濃く残っているのです
「奴？ 奴とはなんだ？」

琴音ちゃんは真剣な表情で天莉ちゃんに聞いてきます。

「奴とは私と永遠のりこむる……怪盗Gです」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6245m/>

お兄ちゃんと妹のすゆことぜんぶ。

2011年7月2日15時44分発行